

國立臺灣大學文學學院日本語文學系所

碩士論文

Department of Japanese Language and Literature

College of Liberal Arts

National Taiwan University

Master Thesis



日本統治時代における台湾の囲碁の史的考察

The history of the strategy game Go in Taiwan during the
Japanese occupation

沈之皓

Chih-Hao Shen

指導教授：徐興慶 博士

Advisor: Shing-Ching Shyu, Ph.D.

中華民國 107 年 8 月

August 2018

目 錄



謝辭.....	iv
中文摘要.....	ii
日文摘要.....	iv
英文摘要.....	vi
序論.....	P.1
第一節 研究動機.....	P.1
第二節 先行研究.....	P.2
第三節 研究構想と目的.....	P.3
第一章 日本統治期台灣の囲碁活動.....	P.6
第一節 時代背景.....	P.6
第二節 囲碁の愛好者に関する台灣人.....	P.9
第三節 台湾と日本の囲碁交流活動.....	P.21
第二章 台湾囲碁活動の開拓者.....	P.30
第一節 日本から渡來した棋士たち.....	P.30
第二節 それぞれの囲碁活動.....	P.33
第三章 台湾囲碁の活動の実態.....	P.37
第一節 人口分布と職業構成.....	P.37
第二節 組織と経営.....	P.44
第四章 日本統治時代の台灣住民の囲碁への評価.....	P.51
第一節 個人が囲碁に対する観点からの分析.....	P.52
第二節 囲碁に含まれる文学性.....	P.58
第三節 戦後初期との繋がり	P.64
結論.....	P.68
参考文献.....	P.71
年表.....	P.75



圖目錄

図一 陳天賜初段披露囲碁大会.....	P.14
図二 置き碁のルール.....	P.16
図三 呉清源と本因坊秀哉の対局解説.....	P.18
図四 高部七段歓迎棋戦.....	P.22
図五 井上六段歓迎棋戦.....	P.24
図六 1935 年始政四十周年台湾博覧会鳥瞰図.....	P.25
図七 本因坊名人来台.....	P.26
図八 木谷実が来台.....	P.27
図九 箕盤の上に咲かす日満親善.....	P.28
図十 日独交流囲碁大会.....	P.28
図十一 田村達太郎.....	P.31
図十二 全島有段者十人抜碁戦.....	P.34
図十三 台湾碁客銘鑑.....	P.37
図十四 台湾棋道創刊號の表紙.....	P.47
図十五 詞宗左卧雲, 右梅魂先生「圍棋」	P.63
図十六 劉聯璧、陳麗山 選「圍棋」	P.63
図十七 葉文樞、張純甫 選「松下圍棋」	P.63
図十八 吳清源と林海峯が六子で指導碁をしている様子.....	P.66

表目錄

表一 『灌園先生日記』の囲碁に関する記事.....	P.11
表二 『臺灣碁客銘鑑』の人数統計.....	P.38
表三 『臺灣碁客銘鑑』と『臺灣人物評』に重なる人物.....	P.41
表四 『高雄碁客銘鑑』の人口統計.....	P.42

謝辞



本論文は国立台湾大学日本語文研究所修士課程の研究成果をまとめたものである。子供から囲碁を学び始めた私にとっては、囲碁と関わる本論文を書く間にとても楽しんでいた。この論文を完成することも、自分の一つ夢を叶えたとも言えるだろう。この過程に多くの方々が協力してくださった。ここに深く感謝の言葉を捧げたい。

特に教授徐興慶先生には指導教官として本研究の実施の機会を与えて戴き、その遂行にあたって終始、研究に対する姿勢や論文の書き方について、ご指導くださった。ここに深謝の意を表する。また、何義麟教授、並びに、陳文松准教授には副査としてご助言を戴くとともに本論文の細部にわたりご指導を戴き、厚く御礼申し上げる。本研究の考查では、陳文松先生に研究についての資料提供など多大なご協力に心から感謝申し上げる。

また、修士課程の勉学中に、前輩の張雅茜、藍雯威、賴亮廷、同級生の黃馨誼、李曉昀、日頃より有益なご討論、助言を戴き、深く感謝申し上げる。この討論のプロセスにおいて示唆に富んだ広い学理の視点をも教示いただいた。そして、前輩の守時愛里から拙稿の校正をいただいた。さらに論文を作成している最中に友人の黃育亭、袁克倫、何誠圃の方々に支えてくれた、合わせて感謝申し上げる。

最後に、経済的にも精神的にも日々励ましてくれたり、応援してくれたり家族全員にお礼申し上げる。

中文摘要



圍棋具有悠久的歷史，是中國四千年來不可或缺的傳統文化，透過遣隋使、遣唐使東傳日本後，便在日本落地深根，逐漸轉變成蘊含日式風格的文化之一。直至 20 世紀，圍棋在日本的發展達到前所未有的高峰，舉國上下擁有大量的圍棋人口。清末民初之際，關於圍棋的文化活動在台灣僅有少量的記載，且多為傳統文人茶餘飯後的消遣。從 1895 年起，台灣進入了日治時代，來台的日本人積極在台灣推廣圍棋文化，為戰後的台灣圍棋奠定了深厚的基礎。

關於日治時代，台灣圍棋文化的相關研究，黃慧貞（2007）提及當時台灣社會已有頗盛的下棋風氣，而且總督府引領提倡類似的休閒活動。李敬訓（2012）也提及日治末期的圍棋棋士－黃水生的相關活動，說明他學習棋藝的情況，以及戰後對台灣圍棋界的影響。此外，陳文松（2016）又發表了三篇論文，更加詳盡地闡述當時的台灣發展圍棋文化背景和台灣人學棋的理由。

本論文主要的研究問題，是探討日治時代的台灣圍棋文化發展，為何日本人要在台灣推廣圍棋文化？台灣人對此的接受度如何？本研究透過相關珍貴史料的發掘與運用，加上統計數據的解析，發現來台的日本人和台灣人運用圍棋形成良好的互動，全台各地皆出現了圍棋的蹤跡，其中以台北、台中、台南、高雄尤為興盛。日治時代的台灣

圍棋除了被運用在社交之外，同時具有修身養性和娛樂的效果，並且在婚喪喜慶等文化面上也能見到圍棋的蹤影。本論文從殖民、被殖民的歷史演變之角度切入，探討相關人物的交流與互動，進而論述圍棋文化在台日關係發展過程所扮演的角色。

關鍵字：日治、圍碁、田村達太郎、台灣棋道、臺灣碁客銘鑑

日文摘要



囲碁は長い歴史を持ち、中国四千年に亘って不可欠な伝統文化である。遣隋使、遣唐使の文化交流を通じて日本に伝來した後、徐々に日本の社会に広がり、日本の代表的な棋類文化になった。1895年、下関条約によって台湾は日本の植民地となった。台湾に渡來した日本人は積極的に囲碁文化を押し広め、戦後台湾の囲碁に関する発展の礎を築いた。

日本統治時代の囲碁文化について、黃慧貞（2007）の研究から、日本統治時代の台湾社会ではすでに碁を打つ風習が盛んになり、総督府もこのような娯楽活動を提唱していたことが窺える。また、李敬訓（2012）は日本統治末期の台湾人棋士－黃水生について言及し、当時の彼の囲碁学習の状況や戦後の台湾囲碁界に対する影響を述べた。そして、陳文松（2016）は、のちに3本の論文を発表し、当時の囲碁文化を詳しく述べ、台湾人の囲碁を学ぶ理由について分析した。

本論文は日本統治時代における囲碁文化を考察したものであり、日本人は何故台湾で囲碁を押し広めたのか、台湾人は囲碁文化に対する受容は如何なるものになったのか、また、当時台湾における囲碁の普及及び発展も本論文の研究焦点となっている。本研究から、台湾に渡來した日本人は台湾の囲碁文化を空前のブームにまで発展させていたことが明らかになった。当時の囲碁は高尚な活動であり、日本人と台湾人とは囲碁活動を通じてよい関係を築いた。そして、台湾の各地にも囲碁が広まり、台北、台中、台南、高雄を中心に発展していった。日本統治時代の囲碁は社交的特性が備わっているほか、娯楽、心身の鍛練といった意味合いもあり、これらも当時の人々が囲碁活動を打った理由だと思われる。さらに、冠婚葬祭の文化的な活動にも囲碁の痕跡が見られる。

本論文は殖民、被殖民の歴史変遷の視野から入り、関連のある人物を取り上げ、その交流の真相を分析したうえ、囲碁文化は日台関

係の発展の歴史の中で如何なる役割を果たしたかを明らかにすることを目的とする。

キーワード：日治、囲碁、田村達太郎、台灣棋道、臺灣碁客銘鑑





Abstract

The purpose of this study is to investigate the history of the strategy game Go in Taiwan during the Japanese occupation. I research why people in Taiwan played Go in those turbulent times, the interaction between Japanese and Taiwanese players, especially how Japanese professional players who came to Taiwan had a great impact on the development of Go in Taiwan.

The research method of this thesis is to analyze the newspapers, diaries, books and magazine writings from the Japanese occupation, and compile those articles that include keywords related to Go. First, this thesis elaborates the background of Taiwan's Go and discusses the reasons why and how Taiwanese people learned Go. In addition, this thesis also focuses on Go exchange activities between Taiwan and Japan.

Furthermore, because most Go players were upper class, the development of Go also included reasons of political and economic gain

in that era. This thesis lists several cases and discusses how these factors impacted the society.



Finally, this thesis suggests a future research direction to investigate Japanese and Korean interaction in Go during the same era, and takes the perspective of how colonization and being colonized have changed through history to explore the exchanges and interactions between relevant individuals, in order to explain the role that Go culture has played in the development of Taiwan-Japanese relations.

Keywords: Japanese occupation of Taiwan、Go、Tatsutarou Tamura

序論

第一節 研究動機

囲碁の起源は、四千年ほど前の中国で、古代の天子－堯が息子の丹朱の為に囲碁を創ったことだと言われている。¹しかし、いつ日本に伝わってきたのかは、その真相が未詳である。囲碁文化の日本伝来は、おそらく5、6世紀、朝鮮半島を経由して伝わったものと推測できる。日本の碁に関する最初の文献は『隋書』で、7世紀初頭の倭人は「碁博、握槊、樗蒲の戯を好む」と書かれている。²少なくとも、日本への伝来はそれ以前ということになる。

江戸時代に入ると、家元制度³の成立によって多くの優秀な棋士が育てられ、21世紀までは、囲碁の実績において世界でも日本の右に出る者はなかった。囲碁における家元制度とは、本因坊・井上・安井・林の四家で構成され、江戸時代が終わるまで維持された。家元たちは、幕府から俸禄を得る代わりに、江戸城で「御城碁」と呼ばれる行事を行い、勝者は四家の中でも別格の存在となった。江戸幕府が崩壊すると、家元たちは俸禄を得られなくなった。明治12(1879)年になると、村瀬秀甫と中川亀三郎を中心として、囲碁の組織「方円社」が創設された。この組織は、従来の家元が認定する段位制度ではなく、実力主義の級段制を取り入れ、新しい時代を築いた。

歴史的にみれば大正・昭和時代は日本囲碁界が世界の先頭を走っていた時代であり、日本国内では囲碁は多くの人が嗜む一般的な趣味だと見られてきた。一方、この時期、台湾の囲碁文化に関しては、清末以降わずかな記録しか残っていないが、主に台湾に来た政府官員の娯楽でしかなかったため、庶民の生活文化に拡がるようなことはなかった。よって、台湾の黎明期における囲碁の発展は日本と深

¹ 何云波『弈境』(北京大學出版社、2006年)、P.12。

² 増川宏一『遊戯－その歴史と研究の歩み－』(法政大学出版局、2006年)、P.69。

³ 技能文化における一流一派の統率者を家元という。その家元が免許状発行権を独占し、壮大な家元文化社会を構成したものを家元制度という。日本大百科全書, JapanKnowledge。

く関わりがあると思われる。特に日本人棋士と台湾人の交流は、台湾での囲碁の普及に大きな影響を与えたと考えられる。



第二節 先行研究

台湾における日本統治時代の囲碁の歴史研究については、黃慧貞 (2007) によって、日本統治時代、台湾社会では碁を打つ風習が盛んで、新聞にもよく棋譜や囲碁会に関する記事が載っていたことが分かる。総督府は台湾を植民支配すべく、文化、教育、経済、社会などの方面でさまざまな政策を打ち出し、その結果直接的、間接的に台湾人の「趣味作り」のきっかけになった。台湾の上流階層も植民政策に影響され、次第に趣味を重視するようになっていった。⁴李敬訓 (2012) にも日本統治時代の台湾囲碁に関する論述がある。当時の日本人が台湾で囲碁を押し広めていたため、囲碁に接触した台湾人が増えていき、台湾の上流階層の活動になったという。⁵

そして、陳文松 (2016) の論文によると、日本統治時代の日本人の活動は確かに台湾囲碁発展の重要な時期であり、台湾人の伝統の「遊芸」文化は、徐々に日本の級段制度に取り換えられた。その中の担い手は田村達太郎五段で、彼が著した『臺灣碁客銘鑑』は台湾囲碁発展の集大成である。この過程で台湾の囲碁は徐々に内地化、職業化した。⁶日治後期には、日本囲碁界を代表する本因坊秀哉⁷や後日に「棋聖」と称される吳清源⁸も引き続き台湾に招かれ、指導碁

⁴ 黃慧貞『日治時期臺灣「上流階層」興趣之探討－以『臺灣人士鑑』為分析樣本』（稻鄉出版、2007年）、P.176。

⁵ 李敬訓『圍棋史話 Vol.2 三三、星、天元』（鳴祝出版社、2012年）。

⁶ 陳文松「日治臺灣圍棋史初探：從東方孝義的觀察談起」、『南瀛歷史、社會與文化 IV：社會與生活』（臺南市政府文化局發行、2016年）、P.263。

⁷ 囲碁棋士。東京の生まれ。本名、田村保寿。19世本因坊秀栄の門下に入り、21世本因坊を継いで秀哉と号した。

デジタル大辞泉：

<https://kotobank.jp/word/%E6%9C%AC%E5%9B%A0%E5%9D%8A%E7%A7%80%E5%93%89-15011>（参照 2018-05-09）

⁸ 日本棋院東京本院九段棋士、十番碁で当時のトップ棋士をすべて先相先ないし定先に打ち込み、第一人者として君臨。

日本棋院サイト：<https://www.nihonkiin.or.jp/player/htm/ki001001.html>（参照 2018-05-09）

を行った。このことによって、台湾囲碁界は更に成熟したとも言える。⁹また、医者である台湾人の呉新榮¹⁰が著した個人の日記を題材にして、彼が囲碁を打つ理由について分析した。呉氏は囲碁を打つ人の考え方を理解しようとし、囲碁を学び始めた。その目的は自身の利益、地位を上げるために、囲碁を通して当時の権力者と交渉することである。¹¹

本論では、以上の論文の内容を踏まえながら、日本統治時代の台湾で囲碁を打った人々の考え、および当時の人々にとっての囲碁の意義を中心に論じていき、より幅広い視点でこの歴史の変遷を再検討したい。本研究により、田村達太郎¹²の台湾渡来前に、『台湾日日新報』の社長である木下新三郎¹³が新聞で棋戦を連載したり、囲碁活動を宣伝したり、台湾で囲碁を押し広めていたことが分かる。また、日本統治時代の囲碁文化に影響された台湾人は、その多くが戦後も囲碁に関する活動を積極的に行っていった。確かに台湾人は日本の囲碁文化を深く受容したが、当時掲載された囲碁に関する詩文、及び詩社の文人の囲碁に関する活動から見ると、中国から伝わってきた伝統文人の囲碁文化も残っていた。よって、戦後の台湾囲碁文化には、中国、日本の二元性が含まれていたと考えられる。

第三節 研究構想と目的

⁹ 陳文松「臺灣圍棋發展史上的擺渡人：從沈光文、田村達太郎到吳清源」（『高雄師大學報』第四十二期、2016年）、P.40。

¹⁰ 吳新榮（1907-1967），綜觀吳新榮之一生，其不僅在臺灣戰後文學運動居於領導地位，同時，亦致力於地方文獻的保存，其對鄉土之熱愛，值得後人尊敬與緬懷。中央研究院，臺灣史研究所檔案館。

http://archives.ith.sinica.edu.tw/news_con.php?no=172（参照 2018-05-09）

¹¹ 陳文松「從躲空襲到避政治：日治後期到戰後初期吳新榮的圍棋戲」（中央研究院臺灣史研究所、2016年）。

¹² 田村達太郎（生沒年不詳）大正・昭和時代の日本人棋士であり、元々東京で自分の道場を開こうとしたが、重病で叶わなかった。このことをきっかけに、田村氏は1909年に台湾に来て新しい目標を探した。作者不詳「四段の碁客としての田村達太郎氏」、『新臺灣』（神戸支局新臺灣社、1916年）、P.56。

¹³ 木下新三郎（1863-?），號大東，肥前人，1897年6月受『臺灣新報』任聘主筆渡臺任職，玉山吟社成員，1900年時仍任合併改題後之『臺灣日日新報』主筆。參照歐人鳳（2015）『臺灣出發，踏查東亞：『臺灣日日新報』主筆木下新三郎的東亞遊記（1906）』。

(1) 研究文献分析法

本論文では、主に国立臺灣図書館が作成した日本統治時代の共用データベースを使って日本統治時代の囲碁に関する新聞、雑誌、本などを収集し、史料の解読、分析を行った。また、臺灣史研究所の臺灣日記データベースも参考している。内容の構成は基本的に関与度が高い記事を同一の章、節にまとめ、原文のポイントを引用しながら論述するという形にしている。そして、収集した資料を年代順の形で整理して年表を作成した。台湾囲碁発展の軌跡と歴史の発展もそれによって、よりはっきり見えてくると思われる。

(2) 研究構想

第一章では、台湾囲碁の発展背景を始め、台湾人が囲碁を学ぶ理由やその方法を探る。また、彼らがそのためにどのような活動をしてきたのか、それが台湾の囲碁にどのような影響をもたらしたかについて分析する。その他、台湾と日本の囲碁交流活動にも注目すると、台湾にいた日本人だけではなく、日本のプロ棋士も度々台湾を訪れて短期間の交流をし、台湾囲碁の普及に貢献したことが考えられる。しかも、このような交流は一方的ではなく、残っている記録は少ないものの、台湾から日本を訪れた台湾人もいる。以上の記事の内容を分析すると、日本人と台湾人の碁に対する態度が窺える。

第二章では、台湾に渡來した日本棋士と囲碁愛好者を軸として展開する。今まで収集した資料によって、彼らは日本統治時代の台湾囲碁界に一番貢献した人たちに違いない。彼らはどうやって、そしてどのようにして、碁を広めたのか、その目的と彼らの考えを、台湾における囲碁活動に関する記事をそれぞれの角度から分析する。

第三章では、田村達太郎が著した『臺灣碁客銘鑑』に注目したい。『臺灣碁客銘鑑』は当代の台湾にいる囲碁学習者の統計資料であり、各県市の囲碁組織、個人の名前や棋力などが記録されている。従つて、そこから台湾囲碁の人口、分布、社会階級を分析すれば、台湾各地の囲碁の発展状況を明らかにすることが出来る。

第四章では、囲碁学習者にはそれぞれの目的があり、個人の作文、日記または囲碁に関する記事も残っていることを述べる。それらを取り上げ、日本統治時代の人々の囲碁に対する感想を考察すれば、当時の囲碁像が見えてくると思われる。また、台湾の詩社も囲碁をテーマにして多くの詩を作り出した。詩は創造者の感情や考えを表現したものであり、その詩の内容を分析すれば、当時の台湾文人の囲碁に対するイメージが窺える。最後に、日本統治時代と戦後の台湾囲碁との関連性についても、本章の論点である。

(3) 目的

本章は台湾囲碁の歴史的背景を踏まえながら、台湾と日本の囲碁に関する交流活動を分析し、台湾の囲碁が発展してきた歴史の流れを概観する。そして台湾の各地域の囲碁活動に焦点に当て、台湾で行われた囲碁に関する関連事件を検討する。また、各々の人物の囲碁に対する考え方を分析することによって、彼らの囲碁に対する態度を明らかにする。この過程に関与する人々、行われた活動、囲碁を普及する目的、囲碁の人口と組織の構成および分布、囲碁の当時代にとっての意義を解明することが本章の目的である。

第一章 日本統治期台灣の囲碁活動

本章では、まず日本統治時代に台灣で囲碁に関する発展状況を概観的に分析し、この50年間の発展の流れを検討しようとする。そして、当時囲碁の活動で活躍していた台灣人も取り上げて分析し、彼らの囲碁を打つ目的、行われた活動を詳しく解明する。台灣と日本の囲碁交流も本章のポイントであり、日本側はどの棋士、何のために台灣に来たか、台灣側はそれに対する態度などは如何なるものであつたかを明らかにする。

第一節 時代背景

清朝の敗戦後、下関条約が結ばれたことによって台灣は日本の植民地となった。1895年から1915年までは日本統治時代の第1期とされる。この時期、台灣総督府は軍事行動のような厳しい統治政策を出し、台灣民衆の抵抗運動を招いた。その後、後藤新平¹⁴は台灣の社会風俗などの調査を行い、その結果をもとに政策を立て、徐々に同化という統治方針を取るようになった。台灣囲碁の発展はこのような背景から始まった。この頃、日本では囲碁がすでに普及し、上流階級から庶民に至るまで、あらゆる階級に囲碁の愛好家がいた。彼らは台灣に来れば統治階級を構成したため、囲碁は上流階級の文化趣味として、徐々に盛んになると考えられる。また、台灣にいる新興の社会階層は総督府の提唱によって生活の品質を重視し、体育、展覧会、観光、音楽、絵、碁、詩、読書などの文化趣味を作り、愛好者を集めて数多くの同好会を設立し、¹⁵囲碁もその一つである。それについては、現在囲碁教師をしている許饒和も、その時期に関することを以下のように述べている。

¹⁴ 後藤新平（1857-1929）、明治～大正時代の政治家。児玉源太郎総督のもとで台灣総督府民政局長を務め、島民の反乱を抑え、諸産業の振興や鉄道の育成を図るなど植民地経営に手腕を振るった。“後藤新平”，日本大百科全書（ニッポニカ），

JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2018-05-09)

¹⁵ 江寶釵、謝崇耀「從瀛社活動場所觀察日治時期台灣詩社區的形成與時代意義」（『中國學術年刊』第三十二期（春季號）、2010年）、P.214。



日本統治時代の台湾人は一般的に象棋をしていたのに對して、囲碁を打った人は大体日本の教育を受けたことがある知識人である。子供の時、大人に友人の家へ連れていかれたが、一部の医者の家には日本人からもらった碁盤と蛤碁石が残っていた。そして、当時の子供はよく対局の雰囲気に驚き、静まり返った。このような環境で育った人々の囲碁に対する態度はほかの時代の人々とは異なる。囲碁は藝術的、哲学的なものだと思われており、断じて軽んじるものではなかった。¹⁶（筆者による日本語訳）

当時の台湾人にとって囲碁は日本の上品な嗜みであり、一定の地位がないと、日本人を通じて囲碁に接触するのは簡単なことではなかった。そして、囲碁は台湾人が日本人と交流する有効的な手段であり、おまけに日本人が積極的に囲碁を押し広めていたこともあり、日本統治時代から自然に流行し始めた。また、象棋も囲碁と同様に当時流行っていた棋類であり、日本人および台湾人の上流階層の棋類活動の選択の比率からみると、台湾人は囲碁を選択する人がやや高かったが、差は大きくなかった。一方、日本人は棋を好む人が台湾人より遥かに多く、特に囲碁を重視していた。それは囲碁が日本の代表的な棋類と深く関係があると推測する。それに対して、日本人は象棋を好む人が明らかに低いのである。¹⁷

また、日本国内で象棋と似ている将棋も同じ現象があり、碁は将棋に比べると、高尚で柔らかな感じがする。将棋は一般人から下劣

¹⁶ 許饒和口述 / 張曉茵整理〔台灣棋話 1〕台灣的日本圍棋。（原文：當時臺灣一般人都會下象棋，下圍棋的多半是受過日本教育的知識分子。小時候大人帶我們去朋友家，有些醫生家裡還留有日本人送的棋盤，以及貝殼棋子。小孩子在旁邊看都會被對局的嚴肅氣氛所震懾住，不敢亂吵。在那種氛圍下，對圍棋的態度很不一樣，感覺到圍棋是一種藝術，一種求道的東西，是不可以輕慢的。）

<http://www.saigo.com.tw/page8.php?viewnum=66>（参照 2018-03-09）。

¹⁷ 黃慧貞『日治時期臺灣「上流階層」興趣之探討－以『臺灣人士鑑』為分析樣本』（稻鄉出版、2007 年）、P.177。

だと見られて嫌がられていた。将棋を指す人は昔から床屋、風呂屋、町屋、職人等と言われているように、こうした階級に大いに流行したのに対して、碁は老人階級、ご隠居階級の間で盛んだった。¹⁸この現象も台湾では象棋をした日本人が少なかった理由だと考えられる。

続いて、以下の記事は 1917 年の『台湾日日新報』で、当時の台湾に於ける囲碁の現状を説明したものである。

（前略）輓近本島に於ける囲碁界は、社会的秩序の整頓乃至趣味の向上と共に非常なる流行を来たし、都鄙を問はず寒暑を論せず、到處丁々の音を聞き、本島人にして公開の席上に手腕を揮ふ者尠からざる盛況を呈するに至れり、筆者、亦「下手の横好き」にして、客年来臺北各方面の碁客及俱楽部を訪問し、斯界の消息に關し得る処ありしが幸いに四段碁伯田村達太郎氏の援助を得、茲に本篇を起草することとなれり讀者これを諒とせられよ。¹⁹

これは台湾囲碁界の現状を述べた新聞連載であり、その内容により、1917 年の台湾は秩序が安定していき、囲碁が徐々に普及していたことが分かる。この後の十数年間、様々な囲碁組織の成立、台湾で行われた各種類の囲碁活動や講習会、日本との交流活動などによって、台湾の囲碁社会は飛躍的に成長し、囲碁の専門誌『台湾棋道』まで発行することができた。以下にその雑誌の文章を取り上げて台湾囲碁界の状況を見てみる。

臺灣に於ける棋界の現状（1934 年）は外觀的には十数年前に比し、同好の諸士は其の数、十倍し、有段者数又倍加するに至ったが、臺灣の現状は内地の大正初期に似ている。そして内地同様、棋士の精進と新進の輩出が、之を開拓する鍵であらねば

¹⁸ 真佐美「趣味の話 碁將棋聯珠」（『臺灣』臺灣通信社、1934 年）、P.58。

¹⁹ 臺灣日日新報「本島の囲碁界（一）」、D04 版、1917/01/09。

ならないが、臺灣には内地のやうな天才的な専門棋士は居らないのであるから、先つ、一団となり、棋界発達の先達にならなければならぬと思ふ。そんな意味に於いても、又興味、娯楽といふ点に求むものを制限されている臺灣の生活に対して、斯うした雑誌が発刊されたことは、一面愉快であると共に意義あることと思ふ。²⁰

上記の記事によれば、1910年代から1930年代までの台湾における囲碁人口の成長が窺え、台湾囲碁界が活発に発展していたことが見て取れる。日本人が積極的に囲碁を押し広めていたほか、当時の台湾は娯楽が少ない時代であり、おまけに台湾総督府が台湾人にさまざまな制限をかけていたため、囲碁が台湾で少数の「よい」娯楽の一つになり、台湾人の囲碁人口もこれゆえ増加しつつあったと考えられる。そして、台湾の社会がさらに不安定になった1940年代に入っても、日本の棋類組織が「棋道報国会²¹」を設立し、海外に棋士を積極的に派遣していた。台湾もその「棋道報国会」の重要な派遣先だと思われる。日本統治時代末期と戦後初期の新聞から、台湾囲碁の発展は戦後まで繋がったことが分かる。

第二節 囲碁の愛好者に関する台湾人

台湾で行われた囲碁活動は、当初は台湾に来た日本人が主だったが、日本人と台湾人の交流により、台湾の民衆も徐々に囲碁に接触していく、様々な資料に現れた。ここからは、日本統治時代に活躍していた台湾人の囲碁愛好者に注目し、彼らが囲碁を打つ理由と目的を明らかにする。以下は1916年の『台湾日日新報』の記載である。田村達太郎が著した『臺灣碁客銘鑑』が掲載されたもので、台湾人の囲碁愛好者の一部も載っている。

²⁰ 稲澤一朗「圍棋私見」、『台灣棋道』（台北同好会、1934年）、P.4。

²¹ 「棋道報国会」とは、日本の囲碁と将棋棋士が戦争を協力するために成立した組織であり、専門棋士を派遣して各地に棋道の精神を植え付けることが目的である。



台灣囲碁界の達人である四段田村達太郎氏が臺灣碁客銘鑑を著して愛好者に配布した。(中略) 台湾人においては、嘉義区長徐杰夫氏二級、阿罩霧区長林幼春氏四級、阿罩霧林獻堂氏五級、嘉義賴玉屏、曹必爽氏六級、同蕭柄臣氏七級、安平郭英章氏八級、彰化潘清潤氏、南投吳宗敬氏、嘉義羅漢章氏九級、郭錦如氏十級。²² (筆者による日本語訳)

『臺灣碁客銘鑑』は当時囲碁を打っていた人が収録されていた銘鑑であり、分析には重要な文献だと思われる。後述の第三章には、その著作を中心に台湾囲碁界の人口、分布を論じた論述がある。

日本統治時期、台湾の社会階級は統治者と被統治者に分けられ、被統治者は段々と平等化になる。総督府は各地の台湾人の資産階層を籠絡しようとし、彼らを基層の行政と治安組織の職に入れ、台湾の統治階層を再構築した。²³記事の台湾人は、徐杰夫、林幼春、林獻堂²⁴の3人は、ともこの類に属すると思われ、彼らにとって囲碁が日本人と交流するよい媒介だったと考えられる。

ここで、以下に彼らの活動の記事を取り上げる。まずは嘉義区長徐杰夫氏二級について述べる。徐杰夫は林本源家²⁵のように囲碁師範を招聘し、同族の人と一緒に囲碁を研究していた。日本人も彼の棋力を称賛し、台湾人の代表的な棋手と認定した。²⁶『臺灣碁客銘鑑』の数十名の有段者の中では、徐杰夫と陳天賜が日本統治時代の

²² 台湾日日新報 「臺灣碁客銘鑑」 D04 版、1916/06/05。

²³ 江寶釵、謝崇耀「從瀛社活動場所觀察日治時期台灣詩社區的形成與時代意義」(『中國學術年刊』第三十二期(春季號)、2010年)、P.214。

²⁴ 林獻堂(1883~1956) “日本化や西洋化を求めず、中国の經典を読破した、多様な思想を持つ啓蒙家である。植民地下の台湾人のため、人権や言論の自由を改善することに力を尽くした。”徐興慶「近代中國知識份子的日本經驗－比較梁啟超、林獻堂、戴季陶的日本觀－」(台大日本語文研究、2011年)、P.216。

²⁵ “二房林爾嘉酷嗜圍棋，就自日本請來一流棋士，以所輸之款為酬金”許雪姬「樓臺重起(上編)——林本源家族與庭園歷史」(新北市政府文化局、2009年)。

²⁶ 台湾日日新報「台湾の囲碁界(五)」、D04 版、1917/01/14。

ただ二人の台湾人段位棋士となった。徐杰夫も積極的に囲碁に関する活動に参与し、来台の日本人棋士と交流していた。嘉義の囲碁風習が台湾人の間で格別盛んだったことも、彼と深く関係があると考えられる。

続いて、林献堂に関する記載に注目する。林献堂が著した『灌園先生日記』によると、彼は台中の霧峰で何度も囲碁に関する活動を開催した。以下に日記の内容を取り上げる。

表一、『灌園先生日記』の囲碁に関する記事（筆者作成、日本語訳）

1930/07/27	午後一時、囲碁会を開いた。参加者は幼春、培英、資瑞、金生、金昆、少聰、階堂、伊若、久保、齊田、伯汾、僕と雲龍の合計十三人。 (原文：午後一時開圍棋會，來參加者幼春、培英、資瑞、金生、金昆、少聰、階堂、伊若、久保、齊田、伯汾、余及雲龍，計十三人。)
1931/01/25	二時半、保甲事務所で久保、齊田に誘われた囲碁会に赴いた、間もなく、陳逢源、林佛樹、高兩貴が自宅に訪れると聞き、雲龍、成龍を残して彼らと打ち、僕は先に自宅に帰った。 (原文：二時半赴久保、齊田所約之圍棋會於保甲事務所，未及片刻，聞陳逢源、林佛樹、高兩貴來訪，留雲龍、成龍與彼等下棋，而余先歸。)
1931/08/30	囲碁例会を開き、主催者を担任した。伊若、久保、幼春、資瑞、金昆、培英、少聰などが参加した。台中病院の小児科の博士である山本宗三郎が訪ねて来て、幼春と一局を打った後帰った。 (原文：開辦圍棋例會，擔任值東。伊若、久保、幼春、資瑞、金昆、培英、少聰等人赴會。台中醫院小兒科醫長醫學博士山本宗三郎來訪，和幼春下一局後歸去。)



1931/09/27	午後三時、天成、成龍を呼び、五番目の弟が主催した圍碁例会と今晚の月見会に赴いた。合計三十人が参加した。 (原文：午後三時招天成、成龍赴五弟主催之圍棋例會及今晚觀月會，合計約三十人。)
1932/04/20	資瑞、金生、新乾を招き、圍碁会の組織について相談して、毎週日曜日に一新会館で会議を開くことにした。 (原文：招資瑞、金生、新乾議組織圍棋會，每日曜開會於一新會館。)
1933/02/18	蔡梅溪が三月下旬に中州俱樂部で台灣人の圍碁競技を開くことを相談に来て、僕に支持を求め、同意した。 (原文：蔡梅溪前來商討三月下旬將開本島人文棋競技於中州俱樂部，請余贊成其事許之。)
1933/12/01	『読売新聞』で本因坊秀哉と吳清源との対局を知り、伊若、成龍と一緒にその棋譜を打った。 (原文：從《讀賣新聞》中知悉本因坊與吳清源對局，和伊若、成龍一同打該棋譜。)
1935/11/24	培英、資瑞を呼び、本因坊秀哉の歓迎圍碁会に赴いた。主催者は羽広三段、会費は二元五角、場所は市民館。 (原文：招培英、資瑞同赴本因坊秀哉之歡迎圍棋會，其主催者羽廣三段，會費二元五角，場所在於市民館。)
1937/03/16	陳天賜元は澎湖人で、現在高雄に住み、圍碁は二段の実力だったため、圍碁俱樂部の教師を担任した。二日前、彼は手紙で二十四、五日に霧峰に来たいといい、都合を尋ねてきた。本日僕は返信し、その件に同意した。西螺廖學昆さんも一緒に招きたいと考えている。 (原文：陳天賜元為澎湖人，現住於高雄，文棋有二段之力量，在是處為圍棋俱樂部之教師，兩日前書來言此)

	廿四、五日欲來霧峰，未知都合如何。本日作書復之，可如約前來，並望招西螺廖學昆同來也。)
1937/03/24	陳天賜圍碁二段が三時に訪ねてきたので、彼を幼春のところに連れていき、培英と対局した。培英が先手の時、培英が負けた。二子を置いた時、天賜が負けた。六時に家に戻った。九時にまた伊若と二局を見に行き、勝敗は先と同じで、十時餘に家に戻った。 (原文：陳天賜文棋二段，三時餘來訪，遂與之同到幼春處，看其與培英對局。培英先手，培英敗，讓二子，天賜敗。六時歸來。九時與伊若再往觀二局，勝敗如前。十時餘歸。)
1940/11/15	木谷実が台中を訪れ、圍碁会を開いた。久我懋正にそれに関して 15 元の活動費を与えた。 (原文：木谷實前來台中開圍棋會，贈與久我懋正活動的相關費用 15 元。)
1942/03/18	四時、僕は柏壽のところに行って、彼と黃水生の対局を見た。ちょうど清水少将と夫人が礼に来た。 (原文：四時余到柏壽處，看其與黃水生下棋，適清水少將及其夫人來道謝。)
1951/10/29	日本で「吳坊の瀧」を訪れた。ここは吳清源と本因坊の対局場所である。 (原文：在日本探訪吳坊之瀧，此處為吳清源與本因坊對局之地。)

林献堂は長期間にわたって台中の霧峰で何度も圍碁に関する活動を開催しており、圍碁に対する熱意が窺える。1932 年、林献堂は文化啓蒙団体である「霧峰一新会」を設立した。主催した活動の中には圍碁会も含まれ、指導者は阿罩霧區長一林幼春氏四級である。²⁷ま

²⁷ 黃慧貞『日治時期臺灣「上流階層」興趣之探討－以『臺灣人士鑑』為分析樣本』(稻鄉出版、2007 年)、P.177。

た、林獻堂は1935年、1937年、1942年にそれぞれ本因坊秀哉、陳天賜、黃水生と霧峰の囲碁会で指導碁をした。林獻堂がこのように力を入れて囲碁会を経営したことから見ると、彼は単に囲碁を媒介にして日本人と交流しようとしただけではなく、自分も相當に囲碁を楽しんでいたと考えられる。

続いて、もう一人の台湾人有段者—陳天賜を取り上げる。陳天賜は台湾人の段位棋士として日本統治時代に活躍していた。彼は田村達太郎の77才の誕生日祝いに、唯一参加した台湾人の棋士である。1930年6月、陳天賜は台湾人で初めて段に上がった囲碁棋士になり、台南公会堂で「昇段披露大会」が行われた。その日の八時から、台南以外の嘉義、高雄の日本人、台湾人碁客も一緒に祝いに来て、出席者は合計45人だった。また、1933年、嘉義市の台湾人碁客が増えていたため、有志者が台湾人を中心とする囲碁クラブを設立した。そして、この「嘉義囲碁研究会」は陳天賜を講師として招聘し、月四回嘉義の慎徳病院で講義を行った。²⁸



図一、陳天賜初段披露囲碁大会（出所：『台湾日日新報』1930/06/17）

²⁸ 陳文松「日治臺灣圍棋史初探：從東方孝義的觀察談起」、『南瀛歷史、社會與文化IV：社會與生活』（臺南市政府文化局發行、2016年）、P.260。

ちなみに、台湾に住んでいる陳天賜がどうやって入段したのかについて、まずは当時の級段制度を説明しなければならない。



一、棋士の入段

日本棋院に於ける棋士の入段は毎年春秋二季に予選を行い、成績の優秀なる春季二名、秋季一名に限り、許されるのである。尚春の予選には一般希望者も参加することが出来る。

(中略)

二、一般棋客の昇入段

棋士に非ざる一般専門家及び素人が段位の免許を得るには日本棋院所定の試験手合に合格しなければならぬが、審査会視角ありと認めたときは之を省略して免許される。²⁹

以上の説明によれば、台湾の棋士はほぼ「一般棋客」に属すると考えられ、当時の入段棋士に関する報道では、日本棋院より入段免許をもらうことが分かった。³⁰よって、台湾人の陳天賜も日本棋院所定の試験手合に合格した可能性があると推測される。また、その説明の後半には置き碁の手合表も付けられている。

²⁹ 白土義雄「圍碁の常識（二）」、『臺灣鐵道』、（臺灣鐵道協會、1939年）、P.45。

³⁰ 臺灣日日新報「入段記念圍碁競技会四日基隆で」、D02版、1929/08/02。



手合割

初段と一段との手合割は互先、即ち一子の差であり、以下之に倣ふ。

九段	八段	七段	六段	五段	四段	三段	二段	初段
							互先	初段
						五先	互相先	二段
					五先	互相先	先	三段
				五先	互相先	先	先	四段
			五先	互相先	先	先	二先三	五段
		五先	互相先	先	先	二先三	二子	六段
	五先	互相先	先	先	二先三	二子	三三三	七段
五先	互相先	先	先	二先三	二子	三三三	三子	八段
五先	先相先	先	二先三	二子	三三三	三子	三子	九段

図二、白土義雄（1939）「置き碁のルール」（出所：『臺灣鐵道』、臺灣鐵道協會）

当時、九段棋士と初段棋士が対局する場合、三子を置く必要があった。それに対して、現代のプロ棋界では正式対局が全部互先になる。時代と共に、対局時間は昔より次第に短くなつたため、体力のある低段の若い棋士が徐々に九段の高齢高段棋士を凌駕していき、プロの段位制度の意味がなくなつていったと思われる。戦後初期、呉滌生への訪問によると、当時の日本の級段制にはまだ「標準」と言える厳密性はなかつたと思われる。例えば、都市と田舎の段位の差が大きく、プロの段以外にアマチュアの段もある。また、棋院は棋界に貢献した上流階級に、段位を贈ることができる。戦前の日本棋院ではアマチュア段位を贈ることが戦後より厳しく、四段までしか贈れなかつた。五段以上の段位は専門家でなければ得られなかつたのである。また、段位がなかつた囲碁の愛好者に関しては、級で

棋力を分けていた。³¹

一方、当時の囲碁に関する新聞記事は主に日本棋士が海外へ赴いて囲碁の指導をしたことについてだったが、台湾囲碁愛好者が東京へ日本囲碁を見学しにきたという記事も時々あった。



日本へ赴いた中国神童の呉清源君の近況について、台湾の碁界で注目を集めている。最近、北台湾の林柏寿一行がフィリピンの水泳選手の遠征をまねて、東京で囲碁の交流を行った。柏寿君、呉清源に八子を譲られたが、連戦連敗であった。続いて、陳振能君が九子を譲られ、一戦一敗であった。最後に楊海勝君が十三子を譲られたが負けた。³²（筆者による日本語訳）

記事が言及した呉清源は昭和時代の中国出身の囲碁名手であり、14歳の頃、中国を訪問した美術商の山崎有民や日本棋士の瀬越憲作によって日本へ囲碁を打ちに行った。その後、彼は日本棋壇を何十年も制覇し、昭和の棋聖と呼ばれた。1929年、呉清源が日本へ赴いてから一年も経っていないなかで、すでに新聞で頻繁に報道されていた。彼の動きは台湾棋界でも注目され、囲碁愛好者の一団の台湾人たちでさえ、呉清源と打ちに東京へ行った。報道によると、日本へ赴く台湾人の棋力はそんなに上手ではないため、それぞれ呉清源に八、九、十三子を置かれてもあっさり負けた。

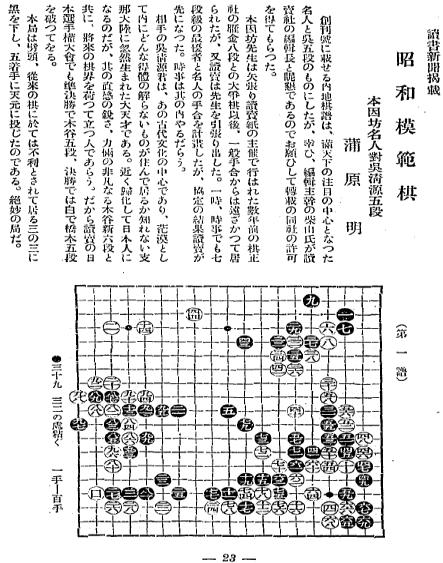
1934年4月、満天下の注目の中心となった本因坊秀哉と呉清源の対局は台北同好会が出版した『台湾棋道』創刊号に掲載され³³、台湾で関心を寄せられた。林献堂たちも『読売新聞』の棋譜を手に入れ、

³¹ 中央日報「漫談圍棋」第4版/綜合新聞 1951/11/11。

³² 漢文臺灣日日新報「度日後之中華碁界神童」（原文：度日後之中華碁界神童呉清源君。其消息如何。亦斯碁界人士所欲知者。據聞最近我臺灣北部。林柏濤君。一行數名。效比律賓水泳選手之遠征。在東京。與之開同文同種國技宣傳交歡會。柏壽君。被讓八子。連戰連敗。繼之以陳振能君。被讓九子。一戰一敗。終則楊海勝君被讓十三子。敗十三子。）、D 04 版、1929/05/29。

³³ 蒲原明「昭和模範棋」、『台湾棋道』（台北同好会、1934年）、P.23。

その内容を並べて研究した。³⁴



図三、呉清源と本因坊秀哉の対局解説（出所：『台灣棋道』、1934年）

この対局は、日本棋界を牽引する本因坊秀哉と中国から日本に来た若い天才棋手である呉清源の対局であり、しかも呉清源は初手から「三三、星、天元」という当時の囲碁界にとって不思議な打ち方で始めたので、その三か月に渡った対局は天下の囲碁人に注目された。その棋譜が『台灣棋道』に載ったことや林獻堂の関心から見ると、これは台湾の囲碁界においても相当に注目されたと思われる。その対局の後、呉清源、木谷実³⁵を中心に囲碁に於ける新布石法は囲碁界で旋風を巻き起こした。新布石法とは、小目から初手を打つ従来の打ち方と異なり、星打ち、天元打ち、五の五のように高目重視のもので、日本棋院に於いても多数の棋士がこれに共鳴し、碁界に新しい時代を開いた。³⁶このような打ち方は現代においても通用

³⁴ 林獻堂『灌園先生日記 / 1933-12-01』臺灣史研究所 臺灣日記知識庫。

³⁵ 木谷実（1909-1975）日本棋院東京本院九段棋士、昭和8年に呉清源と新布石法を発表、実践し碁界に大きな変革をもたらした。自宅を木谷道場として内弟子をとり多くの棋士を育てる。

日本棋院サイト：<https://www.nihonkiin.or.jp/player/htm/ki001060.html>（参照2018-05-09）

³⁶ 真佐美「趣味の話 碁將棋聯珠（中）」、「臺灣」（臺灣通信、1935年）。

し、影響は遙かに大きいのである。

そして、前段落の林獻堂の日記に言及した黃水生は、戦後の台灣囲碁界でも活躍しており、台灣人棋士として二つの時代を渡ったのである。李敬訓（2012）から、黃水生の日本統治時代の動向が窺える。

当時台北の囲碁愛好者が集まったところはすべて日本人が主催する俱楽部である。その中には安達久三が経営していた「臺灣棋院」が最も名高い。黃水生は友人の紹介で臺灣棋院の会員になり、安達久三を師とした。（中略）

日本統治時代の台灣の囲碁界は日本に深く影響を受け、当時台灣で開かれた碁会所はほぼ日本人の運営で、スタイルは大体日本の碁会所と同じである。戦後台灣人が初めて運営した碁会所は、1946年に黃水生が台北市の中山堂で開いた「臺灣棋院」である。その碁会所は単に囲碁の愛好者を集めて打つ場所であり、賭け碁は一切ない。（筆者による日本語訳）³⁷

文中で言及した日本棋院の棋士－安達久三は、1933年に囲碁を教授するために台灣に来た。³⁸田村達太郎の著作『臺灣碁客銘鑑』（1935年版）を調べると、黃水生の名前は確かに「臺灣棋院」にあったが（当時の黃水生が十級）、安達久三の名前はそこに載っていなかった。さらに調べると、安達久三の名前は「板橋俱楽部囲碁会」にあった。また、1934年の『臺灣日日新報』のコラム「臺灣棋院の創設」³⁹には、当時の臺灣棋院の指導役は田村、鶯頭、稻澤、亀井、清水、太田、矢野などの名前しか出てこなかった。以上の事項から見ると、

P.82。

³⁷ 李敬訓『圍棋史話 Vol.3 昭和棋聖吳清源』（原文：台灣的圍棋受日本影響頗深，早年的棋社均為日本人所經營，風格與日本大致相同。真正由台灣人經營的棋社，是1946年黃水生在台北市中山堂三樓開設的「臺灣棋院」。當時棋社純粹以棋會友，絕無下彩情事。）（鳴祝出版社、2012年）P.253。

³⁸ 『臺灣日日新報』「安達久三の來臺」、D02版、1933/12/01。

³⁹ 『臺灣日日新報』「臺灣棋院創設」、D07版、1934/10/14。

李敬訓（2012）が述べた黃水生は安達久三を師としたことと、安達久三が「臺灣棋院」を経営していたという論述は、再検討する余地があると思われる。

また、当時の中華民国副領事である劉家榆も棋の愛好者であり、彼の棋力はまだ大したことはないが、其の研究心の猛烈なことは臺灣同行者の中でも屈指である。という『台灣棋道』の記載によると、彼は各領域の人に棋譜、文献などを臺北同好會に次々と送らせ、臺灣に於ける棋による日華融和を実現したという。⁴⁰

日治末期の1940年に入ると、『台灣新文学』などの雑誌で作品を発表した台湾人医師－呉新栄も囲碁を学び始めた。呉新栄が囲碁を学び始めた理由は「囲碁を打っている人の考え方」をもっと理解したいという目的のためである。当時、戦争が長くなるにつれ、人々の生活も次第に苦しくなっていった。呉新栄はこの時期から麻雀を諦めて囲碁を打ち始め、北門地域の日本人から積極的に指導碁を受けていた。なぜ彼がそのようなことをしたかというと、それは植民統治末期において、子供の教育、家族の産業、個人的な投資、及び地方的な政治を求めたためであり、当時権力を握っていた日本人の娯楽を通して、彼らの考え方を理解しようとしたのである。⁴¹

また、青楠散人（1940）の囲碁観戦記から、日本統治末期の囲碁界の状況が垣間見える。

今は戦さの時である。東は東亜新秩序建設の緒に就かんとして血みどろに鬪はれてゐるし、西は西部戦線に不気味な蠢動を続けてある。正に闇雲低迷として、その何時晴るるやを知らず。いつの日でも、夜明け前の一刻は暗い。日支事変以来、実に趣味や娯楽が非常に選択されて来た。悪趣味のものも追々高尚な

⁴⁰ 劉家榆「圍棋を学ぶ動機と感想」、『台灣棋道』、（臺北同好會、1934年）、P.19。

⁴¹ 陳文松「從躲空襲到避政治：日治後期到戰後初期呉新栄的圍棋戲」（中央研究院臺灣史研究所、2016年）、P.150。

趣味へと転向されて来た。



囲碁は申すまでもなく、最も健全な娯楽の一つであり、同時に方尺の盤上が精神鍛錬の道場として、広く大衆の間に普及されてゐる。實に碁は戦時下の趣味として最も理想的のものである。第一精神を緊張せしめ、修養的、經濟的、社交的といふ点において、正に申分のない道楽である。⁴²

当時は日支事変という戦時のため、社会はまた不安定になり、台湾民衆の生活は政府に厳しく制限されたのである。この環境に於いては、囲碁が政府に認められた数少ないよい娯楽である。これも当時の人々が囲碁を打つ理由だと考えられる。

今まで挙げた台湾人の囲碁学習者は、大体二つのタイプに分けられる。もちろん、全員囲碁に対する興味が窺えるが、陳天賜や黃水生の場合は、棋力を積み重ね、囲碁の教師となり、囲碁教室を開いたのである。一方、徐杰夫、林獻堂や吳新栄のような高い社会的地位を持っている台湾人にとっては、囲碁は単なる趣味ではなく、日本人と交流する媒介でもある。日本人とより深く関係を築くことは彼らが囲碁を学習した主な理由だと思われる。囲碁は植民政策に合っていた娯楽であり、これも時局に対する関心が高い吳新栄が麻雀を諦めて囲碁を打ち始めた主な理由かもしれない。⁴³また、政府の立場からみると、「内地延長主義」のような台湾民衆を日本国民とする理念に対しては、囲碁が当時良い手段だったと思われる。

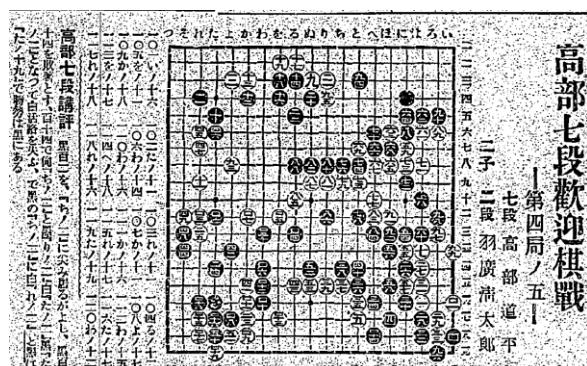
第三節 台湾と日本の囲碁交流活動

囲碁を台湾に普及するために行われた活動には、台湾で生活する

⁴² 青楠散人「鹽腦課圍碁大會戰記」、『臺灣の專賣』（臺灣專賣協會 1940 年）、P.57。

⁴³ 陳文松「從躲空襲到避政治：日治後期到戰後初期吳新栄的圍棋戲」（中央研究院臺灣史研究所、2016 年）、P.135。

日本人が主催した活動以外にも、1910 年代以降、日本にいる棋士が台湾へ短期間指導活動に来たことも含まれる。例えば、当時の四段棋士である高部道平⁴⁴もよく外地に指導しに赴いていた。彼は 17 歳から囲碁結社「方円社」に入り、本因坊秀栄の元で囲碁を学習しながら、1909 年から何十年にもわたって中国、朝鮮、台湾を訪問し、囲碁の交流をしてきた。



図四、「高部七段歓迎棋戦」（出所：『台湾日日新報』1931/03/05）

そして、1918 年、方円社 6 代目社長の岩佐ケイが台湾を訪問した。⁴⁵雑誌『新台湾』の囲碁カラムによれば、岩佐は台湾の棋士より強く、少なくとも二子以上の置き碁で指導碁を行った。注目したいところは、指導を受けた人には台湾人もいたことである。

（前略）本島人側では中部で林幼春が七子を布いて勝ち、本島人中第一の打手と称せらる嘉義の徐杰夫は五子を布いて敗れた。林幼春は定石は知らないけれども、力があると云っていた。

46

⁴⁴ 生卒：1882-1951、日本の囲碁棋士、中国などとの囲碁交流を積極的に行った。彼は 17 年間中国各地で指導碁を行い、日本の囲碁の強さを中国に知らせた。その後、中国の囲碁界も日本の技術を学び始め、中国囲碁界の改革のきっかけになったのである。

⁴⁵ 『台湾日日新報』「岩佐氏歓迎圍碁會」、D07 版、1918/05/18。

⁴⁶ 作者不詳「藝苑消息」、「新臺灣」（新臺灣社、1918 年）、P.18。

林幼春は霧峰林家の成員であり、林献堂が設立した囲碁会で指導を担当していた。また、前節で取り上げた台湾人棋手—徐杰夫の紹介によれば、彼の棋力はおよそ二級だと推測できる。日本の六段岩佐棋士は「本島人中第一の打手」に五子を譲っても勝てるところからみると、当時の台湾人は日本人と比べると棋力がまだ低く、完全に學習者役だったと思われる。ところで、引用文内の「力がある」とは、囲碁の術語で「読みが深い」という意味である。

1930年代に入ると、台湾へ交流しに来た日本人棋士の報道が段々と増え、特に1933年に井上孝平六段が日日新報本社で台北有段者と対局したことと⁴⁷「囲碁速成教授に非凡の才能を認められ到處好評を博しつつある⁴⁸」赤岩嘉平四段の来台が注目された。

そして、呉清源と並び称される昭和時代最強棋士の一人である坂田栄男⁴⁹もこの時点で臺灣棋院を訪問していた。当時彼はたった十三才で、まだ級位棋士であったが、すでに日本棋界で天才少年として期待されていた。以下は当時の記載である。

碁と云へば最近長崎から渡臺した小坂田少年本年十三歳で四級と云ふ天才怪童が現はれた。臺灣の呉清源と云ふ評判であるが小坂田君は振はざる臺灣棋院の一異彩、十六歳迄に是非初段になるとの意気込み。⁵⁰

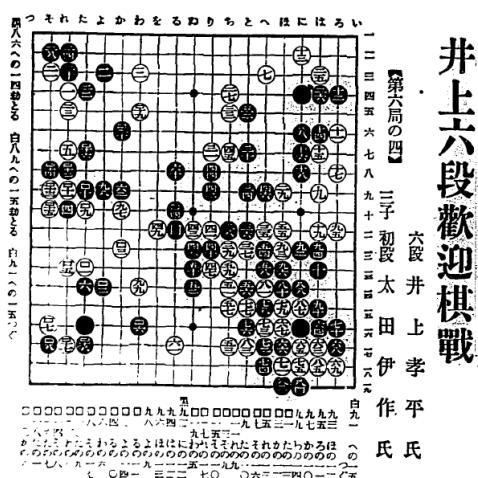
⁴⁷ 『臺灣日日新報』「井上六段歡迎棋戰」、D04版、1933/08/01。

⁴⁸ 『臺灣日日新報』「赤岩嘉平四段來臺」、D02版、1933/08/05。

⁴⁹ 日本棋院東京本院九段棋士、二十三世本因坊、号は「栄寿」。日本棋院理事長、元日本棋院顧問。

日本棋院サイト：<https://www.nihonkiin.or.jp/player/htm/ki000006.html>（参照2018-05-09）

⁵⁰ 紗琴迷「始政四十周年記念博覽會」、『臺灣』（臺灣通信社、1935年）、P.79。

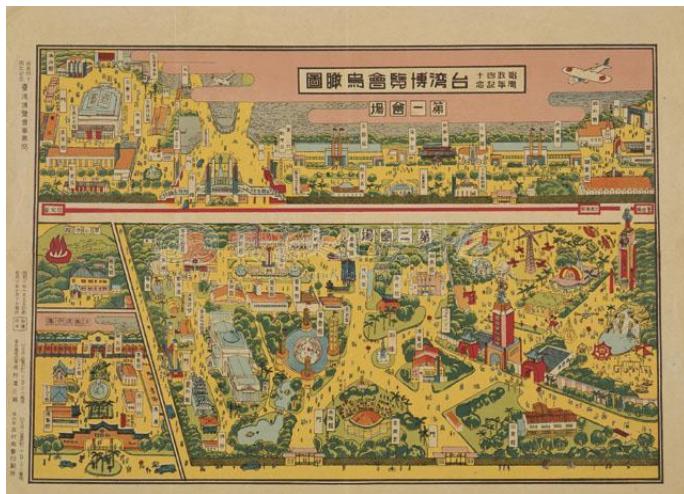


図五、「井上六段歡迎棋戦」（出所：『台湾日日新報』1933/08/01）

1930年代、台湾囲碁界は徐々に盛り上がりをつけていった。臺灣棋院の成立の礎となった。臺灣棋院は当時の代表的な囲碁組織であり、会員制を採用し、会員に対する指導碁、級段の認定、大会の開催、講演、そして機関雑誌などの活動が行われた。

1935年、台北の棋士は「全島囲碁大会」の名義で、本因坊秀哉を台湾に誘って指導碁を行った。この招請は本因坊秀哉に同意を得て、多くの日本棋院の一流棋士と共に台湾に訪問した。その中には、日本囲碁界の次世代の担い手である呉清源も含まれていたが、台湾では注目されていなかったようである。⁵¹しかし、前節で述べたように、台北の碁客がわざわざ日本へ赴いて呉清源を訪問したことがあり、また、1933年の本因坊秀哉と呉清源の対局に台湾にいる碁客も大きく関心を寄せていたのに、呉清源の来台はあまり報道されていなかったのは不思議に思われ、それに関する報道はまだ発見されていないか、もしくは本因坊秀哉を集中して報道したいかと推測する。そして、その年はちょうど日本政府の台湾統治40周年であり、秀哉が台湾に来た理由は「始政40周年記念」に応じて「台湾博覧会」を開催したことと関係があるだろう。

⁵¹ 陳文松「臺灣圍棋發展史上的擺渡人：從沈光文、田村達太郎到吳清源」（『高雄師大學報』第四十二期、2016年），P.34。



図六、1935年始政四十周年台湾博覧会鳥瞰図（日治時期の葉書）

秀哉を台湾に招いたことは、最初の計画段階から秀哉が台湾を巡るまで、『台湾日日新報』で何日も報道されていた。報道の頻繁さから見ると、これは台湾囲碁界における空前の盛況だとも言える。報道によると、秀哉は10月9日から11月30日まで一ヶ月半滞在し、専売局、法院、中央研究所を巡り、台湾の官員及び囲碁組織の棋士と指導碁を打った。そのうち、専売局が出版した雑誌『專賣通信』には、秀哉を専売局に招聘したことに関する詳しい記事がある。

昨秋臺灣始政四十周年記念博覧会開催せられるにあたり本島における多数囲碁同好者の久しく待望してゐました名人本因坊先生が来臺せられまして、臺灣囲碁界に特筆大書、以て一時代を劃することとなりました。輓近特に向上発達しつつある本島棋界はこれがために益々隆盛に向はんとし、私共碁を囲むものの大に意を強うし、亦喜びに堪えない次第であります。

此の名人来台中の好機にあたりで本局囲碁部に於いては、斯道の向上を図る目的を以て一日名人を聘し特別囲碁研究会を開催いたしまし処、棋聖の風貌と棋品に接するため同好会員多人数の参会あり、為に養氣俱楽部階上大広間は一杯であります。



台湾囲碁界もこの盛大な活動に応じて、二日連続で全島囲碁大会を開催した。前節で言及したように、秀哉は台中に来た時、林献堂が創立した囲碁会で指導碁をした。林献堂の息子である林培英は代表として、五子を譲られ対局を行った。そして、秀哉が日本に帰国した翌年、新竹俱楽部の囲碁愛好者が当時秀哉からもらった「名人記念カップ」を賞品にして、「名人記念カップ争碁大会」を開いた。⁵³秀哉が台湾に来たことは、当時台湾にいた囲碁愛好者にとっていい思い出になった。



図七、本因坊名人来台（出所：『臺灣日日新報』1935/11/08）

1940年、今度は日本の偉大な囲碁教育家である木谷実が台湾を訪れた。日本統治時代、台湾に来た棋士の中で、木谷実と本因坊秀哉が日本の囲碁界に於ける歴史的地位が最も高い二人である。木谷実が安永四段と一緒に台湾に来た目的は主に二つある。一つは台湾の民衆に囲碁を普及すること、もう一つは民衆の士気を高めることで

⁵² 作者不詳「名人招聘圍碁研究會」、『專賣通信』（臺灣總督府專賣局、1936年）、P.100。

⁵³ 臺灣日日新報「名人カップ争碁圍碁会大会」、D05版、1936/01/26。

ある。木谷実は台湾に来た後、台北、台中、高雄⁵⁴に滞在し、臺北圍碁同好会が主催した「木谷七段圍碁講演会」で講演を行った。⁵⁵また、彼が台中に来た時、林獻堂も出資してそれに関する活動を行った。⁵⁶第二次世界大戦では、日本で多くの「慰安団体」が結成され、各地域の民衆を応援しに行った。圍碁・将棋棋士も戦争に協力するために「棋道報国会」を設立した。



図八、木谷実が来台（出所：『台湾日日新報』1940/10/27）

そして同じく 1940 年、呉清源も『臺灣日日新報』に招かれ、台湾に指導碁を打ちに来た。前述のように、この時期の日本国内の圍碁界では、多くの棋士が国内外に動員され、様々な「慰安圍碁」を行った。呉清源が台湾を訪問した後、『台湾日日新報』は十五回に分けて呉清源と梶原武雄の対局を連載したと同時に、瀬越憲作の解説も付けて「慰安圍碁」の役割を最大限に發揮した。⁵⁷

当時の日本は、積極的に圍碁棋士を派遣して他国と交流していて、台湾にいた棋士稻澤克忠（1938）三段も圍碁に対して、斯の如く圍碁が今日我が日本のみ所有を許さず、世界的に之が飛躍しつつある実状に対しては我々圍碁人として洵に慶びに堪えない所である。と

⁵⁴ 『臺灣日日新報』「木谷七段歡迎箇會」、D04 版、1940/11/15。

⁵⁵ 『臺灣日日新報』「木谷七段圍箇講演會十二日夜警察會館で」、D02 版、1940/11/07。

⁵⁶ 林獻堂『灌園先生日記 / 1940-11-15』臺灣史研究所 臺灣日記知識庫。

⁵⁷ 陳文松「臺灣圍棋發展史上的擺渡人：從沈光文、田村達太郎到吳清源」（『高雄師大學報』第四十二期、2016 年）、P.35。

いう評価を下した。 58



図九、「箭盤の上に咲かす日満親善」（出所：『台湾日日新報』1934/07/18）



図十、「日独交流囲碁大会」（出所：『台湾日日新報』1941/05/20）

日本と台湾の棋士、愛好者との交流活動のほか、日本で開催された「全日本アマチュア囲碁選手権大会」は台湾にも代表枠を一つ開放して予選を行った。日本棋院はこの活動の優勝者に認定状を与えた。⁵⁹1939年に、台湾人棋士である黃水生は台湾代表として、東京へ赴いて大会に参加したことがある。1935年の『臺灣碁客銘鑑』に

⁵⁸ 稲澤克忠「園碁上達の妙諦」、『臺灣地方行政』（臺灣地方自治協會、1938年）、P.116。

⁵⁹ 臺灣日日新報「日本アマチュア圍碁選手權大會の臺灣豫選」、D02 版、1939/05/30。

よると、黃水生の棋力が僅か四年間で、十級から台灣代表になるまで上がったことから、彼の努力と棋才が窺えるという。黃水生は大会に参加したが、一手の油断のせいでチャンピオンを逃しまったことは残念極まる。⁶⁰

日本人棋士が台灣に渡来し、台灣囲碁の基礎を築いたおかげで、台灣と日本の囲碁に関する交流活動は 1910 年代から 1940 年代までひっきりなしに行われ、台灣の各地を回り、囲碁を教授した。この現象から見ると、日本統治時代の日本棋界は明らかに台灣に重視していたと思われる。確かに短時間の交流で台灣囲碁会のレベルを上げるのは至難だが、報道を通して民衆に宣伝する効果は十分にある。

⁶⁰ 李敬訓『圍棋史話 Vol.2 三三、星、天元』（鳴祝出版社、2012 年）、P.191。

第二章 台湾囲碁活動の開拓者

本章では、台湾に渡った日本人棋士たち及び彼らが行った囲碁に関する活動を中心に注目したい。第一節では、当時の囲碁に対する重要な貢献をもたらした人を取り上げて紹介する。第二節では、彼らが台湾で囲碁を押し広めていた手段や目的を分析する。



第一節 日本から渡來した棋士たち

日本統治時代の台湾囲碁界において、日本政府と共に台湾に来た日本人棋士たちは台湾囲碁界の開拓者だと思われる。渡來した日本人棋士の中で一番貢献した人物は田村達太郎である。田村達太郎は大正・昭和時代の日本人棋士であり、元々東京で自分の道場を開こうとしたが、重病で叶わなかった。このことをきっかけに、田村氏は1909年に台湾に来て新しい目標を探した。⁶¹日治初期以降、田村達太郎はずっと台湾に暮らし、数多くの囲碁競技会を開催したり、複数の囲碁組織を経営して台湾の民衆に囲碁を教えたりして、囲碁を推し広めていた。また、彼は臺灣棋院を設立して日本棋院との関係を築いた人物で、台湾における囲碁の人口と分布の名簿－『臺灣碁客銘鑑』も彼の著作である。その銘鑑には田村達太郎に関する紹介がある。

翁は臺灣に於ける唯一の高段者にして又實に最高權威たり臺灣の棋道として今日の隆盛に至らしめたるは翁の誘掖指導興りて力ありといふべし⁶²

今まで調べた田村達太郎の台湾囲碁界に対する貢献や当時の人々の彼に対する評価から見ると、彼は台湾囲碁界の父と言っても過言

⁶¹ 作者不詳「四段の碁客としての田村達太郎氏」、『新臺灣』（神戸支局新臺灣社、1916年）、P.56。

⁶² 田村達太郎『臺灣碁客銘鑑』（臺灣碁客銘鑑編輯會、1935年）。

ではないだろう。



図十一、田村達太郎（出所：『臺灣碁客銘鑑』、1935年）

田村氏以外に、『台湾日日新報』初任社長の木下新三郎も台湾囲碁界にとって重要な人物である。彼自身は初段の棋士であり、⁶³『台湾日日新報』を通して棋戦、講習会などの囲碁に関する活動を宣伝したり、会社で囲碁活動を開催したりしており、積極的な態度が窺える。⁶⁴木下新三郎は初段棋士であり、資本家でもある。彼は田村達太郎より先に台湾に来て、台湾囲碁の基礎を築いた。囲碁を推進においては、知名棋士と資本家が重要な役割を担っている。田村達太郎は台湾の知名棋士の代表格で、木下新三郎は台湾囲碁界の資本家の代表格である。

そのほか、1922年、日本囲碁界の大きな囲碁組織である方圓社の社長安一廣瀬平治郎も台湾に訪問した。彼は台湾の総督ー田健治郎⁶⁵を訪れ、台湾に囲碁を押し広めることについて協力を求めた。ま

⁶³ 漢文臺灣日日新報「入段披露」“建物會社長木下大東氏。素耽文碁於此道三折肱。人謂之曰能。日前適有事晉京。遂與東京諸能手競技。榮得初段。初段者即所謂登堂者。未入於室也。然技至初段。則已為勁敵。”、D07版、1909/09/19。

⁶⁴ 真佐美「趣味の話 碁將棋聯珠」、『臺灣』（臺灣通信社、1934年）、P.58。
“臺灣では昔大東木下新三郎老先生によって大に碁が社会的に活躍してゐた。最近では田村老翁五段を主催として臺灣棋院なるものが〇〇され日本棋院と連絡をとつて臺灣の斯道の極めに大に貢献せんとしてゐる。其の棋戦譜は臺灣新聞に発表されてオール臺灣のファンを喜ばしてゐる。”

⁶⁵ 官僚、政治家。1919年には文官として初の台湾総督。“田健治郎”，日本大百

た、『臺灣碁客銘鑑』を参照すると、役所で働いていた人はその多くが囲碁を打っていることが分かる。この現象からみると、台湾で囲碁を普及させたのは民間人だけではなく、政府も支持の態度を取っていたことが窺える。しかも、囲碁を押し広めることで文化の面からも台湾人を同化させることができるために、政策に合っていたと思われる。ゆえに、当時の台湾囲碁の普及は、官員と民衆が力を合わせた成果だと考えられる。⁶⁶

当時、棋士の本分には囲碁の「稽古」と「普及」の二点があった。
弱い力も此處に統一された訳だから、此れからは偉大な跡を全部の微力を合わせて印して行くやうに心掛なければなるまい。此れが臺灣棋客の本分だらう。⁶⁷ 1910年、台湾に渡った日本人棋士は新たな地域に着いたばかりで、台湾の囲碁文化はまだ発展していなかったため、囲碁の普及は遙かに重要だったと推測する。1930年代に入ると、彼らの努力によって、この二十年間の囲碁人口は大幅に成長し、棋力の向上も徐々に重視されていった。一方、囲碁を押し広めるためには、棋士だけではなく、情熱を持っている企業家、役人などそれぞれの領域の人材も求められる。これに関して、古城丈夫（1934）は専門家と素人それぞれが囲碁に与えた影響を比較した。

元来、専門家と云ふ方面の人は、技能を売って生活して居る人々が多いのだから、大局から見て斯界の発展を策する人は少ない。反対に、素人には技能の低い人が多いのだが、無償で献身的に働く人、財的援助を無難作にしてくれる人が多い。勿論これは比較的の話で、専門家にも情熱家も居り、素人にも二、三級で人に金を取って数えて居るやうな準専門家も居る。

即ち、斯技の将来の発展は全く情熱的な素人諸氏に負ふ所が

科全書（ニッポンニカ），JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2018-05-09)。

⁶⁶ 陳文松「臺灣圍棋發展史上的擺渡人：從沈光文、田村達太郎到吳清源」（『高雄師大學報』第四十二期、2016年）、P.33。

⁶⁷ 古城丈夫「棋客の本分」、『台灣棋道』（台北同好会、1934年）、P.1。



囲碁の普及にはもちろん棋士の存在が大事だが、情熱を持ってい
るアマチュアも必要不可欠である。囲碁活動を催す場合、資金、宣
伝、場所、組織などさまざまな要素が必要なため、各領域の囲碁愛
好者が重要な役割を担うと考えられる。

第二節 それぞれの囲碁活動

この節では、台湾で行われたそれぞれの囲碁活動に注目し、棋士
たちが囲碁を押し広めた方法を明らかにする。また、記事を通して、
参加者の身分、注目程度、行われた場所などの細かく描写の分析に
よって、当時の台湾囲碁界の発展状況もさらに深く検討するこ
とができると考えられる。

棋士が囲碁組織で指導碁をしたほか、競技的な囲碁大会も台北⁶⁹
から、澎湖⁷⁰、基隆⁷¹、嘉義⁷²、赤崁⁷³、南投⁷⁴、瑞芳⁷⁵、大甲⁷⁶、臺
中、員林⁷⁷、彰化⁷⁸、臺東⁷⁹にいたるまで台湾の各地で行われた。

駄無羅子（1942）が著した「臺東圍碁天狗會漫記」によると、こ
の臺東の囲碁大会は、日本人と台湾人が一緒に参加できる大会であ
り、優勝から五位までが陳萬鐘四級、祖川初段、太田四級、呂威金
二級、曾徳華三級で、内訳は日本人が二人、台湾人が三人がだった。
たしかに台湾全島における囲碁の平均的な実力は日本人の方が台湾

⁶⁸ 古城丈夫「専門家と素人」、『台灣棋道』（台北同好会、1934年）、P.1。

⁶⁹ 漢文『臺灣日日新報』「圍碁大会」、D05版、1909/07/18。

⁷⁰ 『臺灣日日新報』「最近の澎湖島 第一回の圍碁會」、D02版、1912/10/01。

⁷¹ 『臺灣日日新報』「基隆圍碁會盛況」、D07版、1919/01/28。

⁷² 『臺灣日日新報』「嘉義圍碁會」、D04版、1919/10/08。

⁷³ 『臺灣日日新報』「赤崁圍碁大會」、D04版、1929/10/22。

⁷⁴ 『臺灣日日新報』「南投圍碁大會」、D08版、1935/04/13。

⁷⁵ 『臺灣日日新報』「瑞芳圍碁大會」、D05版、1936/11/26。

⁷⁶ 『臺灣日日新報』「大甲秋季圍碁」、D04版、1936/11/07。

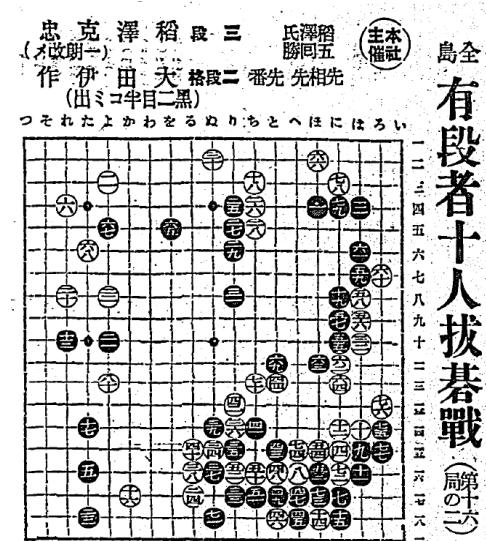
⁷⁷ 『臺灣日日新報』「員林圍碁大會」、D04版、1936/08/16。

⁷⁸ 『臺灣日日新報』「彰化市圍碁大會」、D05版、1938/11/13。

⁷⁹ 駄無羅子「臺東圍碁天狗會漫記」、『臺灣之專賣』（臺灣專賣協會、1942年）、
PP.78-79。

人より遥かに高かったが、地域によっては台湾人も日本人と対抗できるだけの実力があったことが窺える。その祖川の初段免許が日本棋院の免許ではなかったことからみると、その時期の台湾には段位を認定できる場所があった、もしくは勝手に段位の実力を持っていると宣言した可能性があると考えられる。

台湾囲碁の普及は確かに台北を中心にしていたが、新聞の報道や『臺灣碁客銘鑑』の記事によれば、ほかの県市にも一定の囲碁人口が存在することが分かる。そして、『台湾日日新報』には常に有段者がお互いの対局を載せ、説明を付けて読者の囲碁への興味をそそった。



図十二、「全島有段者十人抜碁戦」(出所:『台湾日日新報』1937/08/06)

そのほか、囲碁組織である台北同好会は、放送協会の「成人教育講座」の時間を得て、台湾で最初のラヂオ囲碁講座を開催して、「対局の心得」、「上達の捷徑」、「大手合状景と棋士の風貌」などのテーマについて、それぞれ棋士の稻澤一郎三段と日本棋院棋士の柴山文吾三段が講演して全台湾で放送したことがある。⁸⁰講座のテーマも念入りに考えたことがあり、短時間で、しかも碁盤の前ではない状

⁸⁰ 作者不詳 「棋界往來」、『台灣棋道』（台北同好会、1934年）、P.31。

況で定石や布石といった具体的かつ技術面の事柄を説明するのは難しかったため、より心理的な心がけ、囲碁界の現状などのテーマを選んだのである。また、以下の引用のように、総督府の専売局などの囲碁同好会でもこの囲碁風習に応じ、自局で出版した雑誌に囲碁コラムにまで載せることができた。

最近本島に於て都鄙を論せず、一般に囲碁熱の勃興見るべきものあり、此の機会に於て大方の要望をも取入れ日本棋院の二段庶務課勤務の中村馬吉氏を煩はし、本号より囲碁講座を特設し、初心者及び同好者の為に誌上講演をお願することとした。

81

その内容は、精神面の「囲碁の心得」から技術面の「矯正すべき手」まで多岐にわたり、五か月間連載された。

これまで収集した資料の分析により、日本統治時代の台湾に囲碁を普及させた方法には、おおよそ（1）指導碁（2）囲碁競技会の開催（3）棋士の棋譜の新聞連載（4）囲碁技術に関する文章の雑誌掲載（5）日本本土の知名棋士を台湾に招いての交流（6）ラヂオでの囲碁講座、などがある。また、冠婚葬祭のような特別な日にも囲碁会に関する記事がある。当時の葬式で追悼囲碁会が行われたことがあり、死者が生前囲碁が大好きだったことから、囲碁競技会を慰靈の儀にして参加者は囲碁を打ちながら死者を弔うことになった。⁸²そして、臺灣棋界の元老田村達太郎の誕生日を祝う時も、全島囲碁大会が行われた。ここで挙げた囲碁会は交友と競技のためだけに存在していたのではなく、追悼や喜寿のような文化的な活動も囲碁を通して行っていた。⁸³特に注目してほしいのは、この二番目の記事は台湾棋界の元老である田村達太郎の七十七才の誕生日についてで

⁸¹ 中村馬吉「圍棋講座」、『專賣通信』（臺灣總督府專賣局、1933年）、P.94。

⁸² 『臺灣日日新報』「故永田氏追悼圍碁會」1931/03/15。

⁸³ 作者不詳「棋界ニュース」、『台灣棋道』（臺北同好會、1934年）、P.32。

あり、百五十名以上の同好者が参加したこと、間接的に田村達太郎の台湾囲碁にとっての重要性を証明できるだろう。日本統治時代の囲碁に関する活動の頻繁さや多彩さが感じられ、徐々に台湾各地に囲碁が広がっていったことが分かる。



第三章　台灣囲碁の活動の実態

田村達太郎は日本統治時代に台灣にいた囲碁棋士の代表的な存在であり、しかも一番積極的に囲碁を押し広めていた棋士でもある。彼が著した『臺灣碁客銘鑑』には、主に台灣にいる囲碁学習者の地域、所属、棋力が記録されている。それを分析すれば、当時囲碁を学んでいた台灣人と日本人の比率、碁を打つ人の職業、そして台灣各地の囲碁の学習状況が解明できると思われる。



図十三、台灣碁客銘鑑（出所：臺灣碁客銘鑑編輯會、1935年）

第一節 人口分布と職業構成

日本統治時代の台北は、台灣の政治、経済、文化活動の中心地である。台灣に渡來した日本人も多くが台北に住んでいたため、台灣の囲碁発展も自然と台北から始まったのは間違いない事実であるが、検討する必要な部分もある。何故ならば、それはその時期に台灣滞在のただ二人の台灣人段位棋士は、南臺灣に住んでいたからである。このことから見ると、南台灣の囲碁組織も台灣人を段位棋士に培て上げる規模と能力があったと思われる。⁸⁴それについて、以下は『臺灣碁客銘鑑』を通して統計した各地域の囲碁人口分布と職業構成で

⁸⁴ 陳文松「日治臺灣圍棋史初探：從東方孝義的觀察談起」、『南瀛歷史、社會與文化 IV：社會與生活』（臺南市政府文化局發行、2016年）、PP.246-247。

あり、その資料を詳しく整理すれば、台湾団碁發展の概観もはつきり見えるだろう。



(1) 人口分布

表二、『臺灣碁客銘鑑』の人数統計（筆者作成）

地域	人数	台湾人人数	比率
臺北州	2623	60	2.3%
新竹州	165	3	1.8%
臺中州	312	29	9.2%
臺南州	435	41	9.4%
高雄州	593	20	3.3%
臺東廳	78	2	2.6%
澎湖廳	59	13	22%
花蓮港廳	101	1	0.1%
総人数：4366人　台湾人：169人　比率：3.9%			

(2) 団碁組織における職業構成（臺北州）

a.政府機関：

総督官房、内務局、財務局、殖産局、官林所、度量衡所、文教局、警務局、鉄道部、遞信部、郵便局、電信局、法院、専売局、中央研究所、台北医院、台北刑務所、台北市役所、台北医師会

b.学校：

台北医学専門学校、臺北第一中学校、臺北商業学校、臺北工業学校、臺北第一高等女学校、臺北第二高等女学校、臺北第三高等女学校、末広小学校、樺山小学校、建成小学校

c.会社：

帝国生命台北支店、日本生命、臺灣倉庫会社、日本樟腦会社、商工銀行、臺電俱楽部、臺銀俱楽部、中央市場団碁会

d.一般の団碁会：

笊天会、仙遊会、棋友会、臺灣囲碁研究会、方圓俱楽部、大衆囲碁俱楽部、臺灣棋院、新起会、若竹会、八甲会、新富会、入船会、

e. 地域毎の囲碁会：

城南囲碁俱楽部、大同会（栄町）、本町会、大和町、表町、大正町、西門公会、城東（東門方面）、城南、城北（大稻埕）、松山、汐止、北投

資料から見ると、台湾囲碁の人口は半数以上が台北に集中していたことが分かる。そして囲碁学習者は政府官員、法律界、医界、公務員など地位の高い知識階級が多くを占め、政府機関、会社、学校にも囲碁組織が存在する。その五種類の囲碁組織のうち、「政府機関の囲碁会」や一部の「一般の囲碁会」は台湾囲碁界に大きな影響を与えたと考えられる。

まずは「政府機関」の囲碁組織を見てみる。その中には、台湾に対する政策を立てた要人が多く、明らかに一番高い社会地位を持っている。台湾総督府専売局も自らの専門誌「專賣通信」で囲碁に関するコラムを出している。そして、重要な囲碁組織「台北同好会」の成立も総督府関係や其他の好棋家が珍しく一堂に会して、得意の棋戦に興じたり、歓談に時を過ごしたことがあった。⁸⁵とあるように、台湾囲碁界と政府の要人が共に設立したものだと思われる。

次に、「一般の囲碁会」を見てみる。台湾囲碁界をリードした有段棋士は主に「一般の囲碁会」に属した。例えば「台湾囲碁研究会」や「台湾棋院」は田村達太郎が主催した囲碁組織であり、日本棋院との交流や碁専門誌の発行など、囲碁界の重要なイベントもこのような囲碁組織が行ったのである。それに対して、大部分の「一般の囲碁会」の組織は囲碁が好きな愛好者が設立した同好会が多かったのである。ほかの「地域毎の囲碁会」や「会社の囲碁会」は、主に普通の囲碁同好者が組織したもので、それは台湾で囲碁を押し広め

⁸⁵ 古城丈夫「臺北同好會成立の経過とその事業」、『台灣棋道』（台北同好会、1934年）、P.28。

た成果であり、単一組織の影響力はあまり大きくなかったと考えられる。そして、「学校の囲碁会」については政府の教育政策と関わりがあると思われ、学校にまで囲碁部があるということは、当時の囲碁文化は単に成人だけの嗜みではなく、子供にとってもよい趣味だったと考えられる。

また、町の人口と経済は直接的に囲碁の学習人数に大きく影響を与える、町の規模が大きければ大きいほど、囲碁学習者もそれにともなって多くなる。この概念は現代囲碁の発展状況にも一致している。統計資料によれば、台湾人は総囲碁人口の 3.9% を占め、特に澎湖、台南、台中の台湾人が熱心に囲碁に触れている。(各々その地域の 22%、9.4%、9.2% を占めている。)

中国に残された史料から見ると、少なくとも十九世紀半ば以前、台湾社会で囲碁が盛んになり、地理と風習の角度から見ても、澎湖に於ける囲碁の発展状況と実力は台湾に勝ると考えられる。⁸⁶また、台南で囲碁を学習する台湾人はほとんどが嘉義に住んでいて、新聞にもよく報道された。1915 年、嘉義の囲碁組織には 80 余名があり、台湾人 8 人が誘われて入会した。その組織は朝九時から夜十一時まで活動し、囲碁教師も二名を招聘して、⁸⁷相当熱心に運営していたと感じる。1933 年、組織の規模はすでに 162 名までに増え、そのうち台湾人は 32 名になった。⁸⁸そして、台湾人たちが自分で「嘉義方圓俱楽部」を設立し、台湾人の初段棋士である陳天賜を嘉義に招いて囲碁を教授してもらった。⁸⁹確かに台北と比べると嘉義の囲碁人口はそれほど多くないが、台湾人の比率から、囲碁に対する情熱が窺える。

続いて、果たして台湾人の囲碁爱好者は本当に知識階級の人が占めていたのかどうか、以下では林進發（1929）が著した『臺灣人物

⁸⁶ 陳文松「日治臺灣圍棋史初探：從東方孝義的觀察談起」、『南瀛歷史、社會與文化 IV：社會與生活』（臺南市政府文化局發行、2016 年）、P.250。

⁸⁷ 漢文『臺灣日日新報』「嘉義圍碁盛況」、D06 版、1915/10/15。

⁸⁸ 漢文『臺灣日日新報』「嘉義籌聘講師」、D04 版、1933/10/24。

⁸⁹ 『臺灣日日新報』「嘉義圍碁俱樂部盛況有段者一名」、D04 版、1937/03/23。

評』⁹⁰と『臺灣碁客銘鑑』を照合し再検討する。以下は両方に重なる台湾の代表人物の詳細である。

表三、『臺灣碁客銘鑑』と『臺灣人物評』に重なる人物（筆者作成）

名前	棋力	職業	所属	地域
林熊祥	四級	大有物産株式会社長	臺灣棋院	臺北州
陳振能	六級	朝日興業株式会社取締役	臺灣棋院	臺北州
林柏壽	四級	商工銀行取締役	大正町	臺北州
郭邦光	三級	士林信用組合長	大稻埕	臺北州
郭盈來	四級	如水社社員	大稻埕	臺北州
陳復禮	八級	同風會会長	松山	臺北州
蘇清淇	八級	清和鉱業社長	汐止	臺北州
蔡伯汾	二級	弁護士	台中市	台中州
林幼春	二級	社会運動家	大屯郡霧峰	台中州
林獻堂	四級	社会運動家	大屯郡霧峰	台中州
徐杰夫	初段	嘉義区長	嘉義市	臺南州
徐乃庚	八級	実業家	嘉義市	臺南州
蘇孝德	八級	方面委員	嘉義市	臺南州
劉茂雲	五級	臺南州勸業課長	臺南市	臺南州
林茂生	七級	文学士	臺南市	臺南州
李幾法	十一級	高雄州協議会員	東港郡	高雄州

統計した結果によると、合計 16 人が『臺灣人物評』と『臺灣碁客銘鑑』の両方に現れており、また彼らの所在地が台北、台中、台南に集中している。わずか三百数名の台湾の代表的な人物の中で少な

⁹⁰ 本作は台湾人記者である林進發が 1929 年に著した銘鑑であり、林嵩壽を始め、当時の台湾人精銳が収録された。中には総督府評議会員や州市協議会員以外にも、学者、芸術家、宗教家、企業家、社会運動家などがあり、台湾で活躍した 374 名の台湾人が紹介されている。

くとも 16 名が囲碁を学んだことから見ると、日治における囲碁の発展は明らかに台湾人の知識階級に受容されている。また、台中、台南は台湾人の囲碁人口比率が高い県市であり、その地の知識階級が囲碁に接触したことで、周りの台湾人もそれを機に囲碁を学び始めたと推測する。

『臺灣碁客銘鑑』の統計によると、高雄は台湾で囲碁人口が二番目に多い都市であり、1938 年には高雄の囲碁愛好者のリスト『高雄州碁客銘鑑』⁹¹も出版された。この『高雄州碁客銘鑑』に収録された囲碁人口を統計すれば、『臺灣碁客銘鑑』と比べて分析することができる。

表四、『高雄碁客銘鑑』の人口統計（筆者作成）

地域	人数	台湾人人数	比率
岡山郡	58	4	6.9%
旗山郡	50	1	2%
高雄市	682	24	3.5%
潮州郡	46	1	2.2%
東港郡	68	12	17.%
鳳山郡	87	6	6.8%
屏東市、郡	195	8	4.1%
恆春郡	26	1	3.8%
合計：1213 人　台湾人 57 人　比率：4.7%			

これは 1938 年の統計であり、1935 年の『臺灣碁客銘鑑』では高雄の囲碁人口が 2 倍以上増加した、という結果が出ている。わずか三年の間に高雄の囲碁がそれほど向上するとは想像しにくい。つまり、『臺灣碁客銘鑑』の統計人数はそれほど的確ではなく、あくまでも大まかな統計だと推測する。『高雄州碁客銘鑑』は現地で、しかも

⁹¹ 肥後仲之助『高雄州碁客銘鑑』（1938 年）。

单一の州だけを統計したため、精度は『臺灣碁客銘鑑』より高いだろう。このことから見ると、1935年『臺灣碁客銘鑑』に統計された臺灣囲碁の総人口は4265人だが、実際にはすでに1万人を超えていたと思われる。

続いて、「台湾の囲碁界（二）」では、囲碁人口の性別について言及している。

*婦人界に於ける囲碁 本島に於ては未だ婦人界に囲碁の流行を見ず○雖も内地に在っては婦人にして碁道を専攻する者すぐなからず、○近ある方面の上流婦人界にては交際上の機関に利用され師に就き碁道の研鑽に没頭する者多し現今我邦に於ける婦人界の名手は謡曲喜多流の宗家に嫁せる喜多ふみ子女史にして、女史は方圓社の出身にして「四段格」なり此他初段格以上の婦人は東京のみにて十名以上を数ふべし⁹²

日本の囲碁学習者は男性が主だが、喜多文子⁹³を中心に囲碁を研究する女性たちもいる。しかし、日本統治時代の台湾の囲碁学習者は男性しか記録に残っていない。それは当時男女の地位が不平等だったからだと推測できる。囲碁は上流階層の競技であったことも、囲碁を学ぶ人がほぼ男性だった理由だと考えられる。一方、日治以前と以後の台湾を比較すると、植民地となった台湾は、物質の面では引き続き日本がもたらした「現代化」の衝撃を受け、女性の纏足の慣習が減り、女性は徐々に家庭から社会へ歩き出し始めた。⁹⁴1932年、婦人棋士である竹田以津が台湾の女性に囲碁を押し広めるために、天立正通初段と共に日本棋院から台湾を訪問し、台湾の囲碁愛

⁹² 『臺灣日日新報』「台湾の囲碁界（二）」、D04版、1917/01/10。

⁹³ 喜多文子（1875-1950）、日本棋院に所属する囲碁の棋士。多くの女流棋士を育て、現代女流碁界の母と言われる。

⁹⁴ 翁聖峰「日治時期職業婦女題材文學的變遷及女性地位」（『台灣學誌』創刊號、2010年）、P.2。



好者と交流したという記録がある。⁹⁵しかしその後、日治台灣では依然として女性の囲碁の打ち手に関する報道が見つからないため、その活動がもたらした効果は再検証する必要がある。

第二節 組織と経営

台湾の囲碁界は二十世紀以降日本人が台湾に渡ってから次第に盛んになってき、1910から1942年にかけてさまざまな囲碁組織が相次いで設立された。たとえば、日治初期の囲碁団体－仙遊會(1909)は会員がわずか十数人ほどの小さい組織であり、会員輪番で毎月一回各自宅を会場に競技会を開催した⁹⁶。つまり、この囲碁団体は単に碁を打ちたい日本人が集まり、毎月定期的に囲碁の交流を行ったもので、囲碁を民衆に普及させようとする意識はなかった。純粋な囲碁組織のほか、通信局の碁天狗連（1918）⁹⁷（「天狗」とは棋力を自慢する人という意味であり、日本統治時代の囲碁組織ではよく名前として使われていた。）のように、ある会社の社員が自主的に設立した囲碁組織もある。通信局以外にも、専売局、水産課、鹽腦課などのさまざまな会社が行った囲碁活動の記載が残っている。この現象からみると、当時の日本の囲碁はすでに民衆に普及して活発に発展していたと感じられる。台湾に渡って来た後も、各会社の囲碁人数で団体を設立できるほどだからである。

そして30年代までは、確かに数多くの囲碁組織が成立したが、中心機関と研究施設はなかったようである。柴山文吾（1934）は以下のようにこの現象について述べている。

本島の囲碁の隆盛発達はすばらしい者で三都の外にこれ丈け

⁹⁵ 陳文松「日治臺灣圍棋史初探：從東方孝義的觀察談起」、『南瀛歷史、社會與文化 IV：社會與生活』（臺南市政府文化局發行、2016年）、P.258。

⁹⁶ 作者不詳「碁界-仙遊會と縁起」、『運動と趣味』（台湾体育奨励会、1916年）、P.52。

⁹⁷ 烏鷺生「通信局の碁天狗連」、『臺灣通信協會雜誌』（臺灣通信協會、1918年）、P.49。

棋客の有る都市はまづありますまい。此の点では当台北は日本一と思われます。唯此の二十余名の有段者千二百名の囲碁ファンのある大都市にも拘わらず未だ一箇の研究機関も無いと云ふことだけは、私には實に不思議に考えられる次第であります。

98

つまり、この段階の台灣の囲碁人口は飛躍的に上昇し、日本においても三都に引けを取らないほど盛り上がったが、日本棋院のような、台灣の囲碁界を束ねる組織がなかった。実力者を一か所に集めて碁を研究しないことには、台灣囲碁の先端の棋力をより一層上げるのは困難だと考えられる。台北同好會⁹⁹（1934）はこのような背景の下、總督府の能澤氏、由本両氏、内務局の稻澤氏、法院の伴野氏、州庁の野口氏及び華南銀行の有田氏などの有力者の援助により、台灣囲碁の技術向上を目的として設立されたものである。同好会の大綱は以下の三点である。

- (1) .日本棋院の支部設置の機運を促進せしめること。
- (2) .棋専門誌を刊行すること。
- (3) .内地優秀棋士の定期的招聘、台灣有段者の研究手合及一般団体の対抗戦の開催をなすこと。

記述から見ると、(1) と (3) は連携事項だと考えられ、日本棋院との関係を築くことを通して、内地棋士との交流にも増えていくという見込みがあり、台灣の棋士もそれによって棋力を向上できると期待された。そして 1936 年、日本棋院が台灣支部を設立し、有田勉三郎が理事長に就任した。¹⁰⁰また、(2) の棋専門誌の刊行とは、台

⁹⁸ 柴山文吾「JFAK ラヂオ放送圍棋講座」、『台灣棋道』（台北同好会、1934 年）、P.10。

⁹⁹ 古城丈夫「台北同好会成立の経過とその事業」、『台灣棋道』（台北同好会、1934 年）、P.28。

¹⁰⁰ 『台灣日日新報』「日本棋院台灣支部の役員顔ぶれ決す」、D07 版、1936/02/10。

湾が創始した棋専門誌－『台灣棋道』である。この雑誌の発刊目的は、棋に趣味を持つ人たちの親睦をはかると共に、お互に、棋そのものを研究して、技倆の発達を期し、品位の向上を図らうとする。
之は、特に娯楽趣味に乏しい臺灣に於いて、甚だ結構なことである。

¹⁰¹今まで収集した資料に「台湾に於ける娯楽は乏しい」のような記述を何度も見かけたが、そこから当時の台湾の娯楽に関する発展は、まだ日本に及ばなかったことと、日本の統治方針が厳しかったことが推測される。『台灣棋道』の発行は台湾囲碁の発展の里程碑だと思われ、台湾の囲碁人口はすでに雑誌の発行を支えられるまでになってきたことを示している。以下に『台灣棋道』に掲載された臺北同好会成立の経緯を取り上げる。

（前略）話は次第に臺灣の棋界の現状移って行き、読売新聞が臺北だけで最近講読者が数百人増えたとか、鈴木先生の囲碁辞典が一軒の本屋に百部近い予約の申込があったとか、各方面に話は散って行ったが、結局は五百万人も人口がある臺灣から誰か呉五段のやうな天才が現れないものかしら、其の為には現在の如く中心機関もなく、又研究施設もないのでは、棋の打手は幾らあっても、増えても、品性の向上は期しえない。又若い天才も出かねる。¹⁰²

上述の内容は台湾棋界人口の向上について言及している。鈴木為次郎が編纂した囲碁辞典は高い人気が得られたが、当時の台湾に一流の棋士を育てられる組織がないことを残念に思ったため、その同好会を設立したのである。同好会会員の構成については、大部分が官庁、会社などで職を持ち、余暇が充分ない人ばかりだった。このことから、彼らの囲碁に対する熱意が窺える。

¹⁰¹ 能澤外茂吉「棋道禮讚」、『台灣棋道』（台北同好会、1934年）、P.1。

¹⁰² 古城丈夫「台北同好会成立の経過とその事業」、『台灣棋道』（台北同好会 1934年）、P.28。



図十四、台灣棋道創刊號の表紙（出所：『台灣棋道』、1934年）

また、『臺灣碁客銘鑑』によると、当時の台湾における最強の囲碁組織は、日本棋院の高段棋士－瀬越憲作と田村達太郎が組織した臺灣囲碁研究会である。田村達太郎が日治初期から台湾で囲碁を押し広めていたことは、1930年代に設立された臺灣棋院の礎となつた。そして彼も日本プロ囲碁の概念を植民地の台湾に基礎を築いたパイオニアである。¹⁰³

続いて、臺灣棋院が行った活動を見ていく。現在収集した資料によれば、臺灣棋院の活動には「大衆囲碁講座」と「有段者五人抜戦」があった。以下はそれに関する活動の記述である。

臺灣棋院では今所属有段者の教授受付日を左の通り定めた、月水金の三日は初心者の指導とし、テキストに基づき基礎的定石の詳細な説明をなす由、尚不日大掛碁盤の到着を待ち時々、大衆囲碁講座を開く。（月）鷺頭三段（火）亀井二段、矢野初段（水）大田初段、水初段（木）安達三段格（金）稻澤三段（土）清水初段（田村五段は毎日出席）¹⁰⁴

臺灣棋院では、有段者が集まって民衆のために囲碁講座を開き、

¹⁰³ 陳文松「臺灣圍棋發展史上的擺渡人：從沈光文、田村達太郎到吳清源」（『高雄師大學報』第四十二期、2016年）、P.34。

¹⁰⁴ 『臺灣日日新報』「圍碁指導教授」、D02版、1934/11/20。

初心者と経験者に分けて二種類の講義を行った。このことにより、臺灣棋院を設立した目的の一つは、民衆に囲碁を押し広めることだったということは確実である。また、「有段者五人抜戦」とは、臺灣棋院の有段者たちを対戦させ、それを通して棋力を高めることを目的とした。臺灣棋院は日日新報と提携して、その対局棋譜を新聞に掲載して民衆に宣伝した。¹⁰⁵以下の叙述は「有段者五人抜戦」に関する説明である。

全島囲碁同好会待望の五人抜棋戦を開始する事になり、稻澤三段の講評に解説を加へ、本月号より掲載する事になりました。参加者は三級以上有段者にして、参加者の抽籤を行ひ対局順位を左記の通り決定いたしました。（中略）¹⁰⁶

この棋戦に参加するためには最低でも三級以上の棋力が必要であり、合計 19 人の参加者がいた。対局は新聞に十何回連載され、稻澤一郎三段による講評を加えられた。

そして、囲碁組織の成立に関する記事もよく新聞に掲載された。囲碁組織の代表人物は、大体その組織の棋力最強者であり、以下はそれに関する報道である。

台北囲碁会（田村達太郎）

既記台北囲碁会は会場の設備等一切整頓したるにより、本日より普く同好会員の囲碁研究に応すべしと¹⁰⁷

臺灣囲碁会（田村達太郎）

今回当地の同好者によって臺灣囲碁会組織されたるが、同会は本

¹⁰⁵ 『臺灣日日新報』「臺灣棋院の五人抜戦」、D08 版、1935/06/07。

¹⁰⁶ 作者不詳「五人抜棋戦」、『臺灣地方行政』（臺灣地方自治協会、1939 年）、P.152。

¹⁰⁷ 『臺灣日日新報』「臺北圍碁會」、D05 版、1909/08/20。

島内同好者の棋品を高め且つ親睦を図る。¹⁰⁸



方圓俱樂部（小川儀一郎）

東京の碁客三段小川儀一郎氏は今回当地同好者の勧誘により、來臺し撫臺街二丁目四十一番地に囲碁教室を設け、方圓俱樂部と称する。¹⁰⁹

小川儀一郎が主催した方圓俱樂部の背後に、日本にある最大囲碁組織である方圓社の支持を得られたことが、以下の記載によって見て取れる。

撫台街方圓碁俱樂部は、以前東京方圓社と交渉し、支社設立の同意を得た。このことを公表するために、五日に弘法寺で囲碁会を開催する予定がある。すでに各機関に知らせた。(筆者による日本語訳)¹¹⁰

朝、廣瀬平治郎（方圓社長）は方圓社の拡張について述べ、協賛を募った。台湾製の碁盤と碁石一組を送ると約束した。(筆者による日本語訳)¹¹¹

台湾日治時期第8任の総督である田健治郎の日記に、方圓社の社長である廣瀬平治郎が自ら台湾に来て、方圓社台灣に支社を設置して営業を拡大する件を相談したという記録が残っている。従って、廣瀬平治郎の視点から見ると、この時期の台湾は囲碁を発展させるのに相応しい時期だとの見込みがあったと思われる。

¹⁰⁸ 『臺灣日日新報』「臺灣圍箚會成る」、D03版、1918/02/12。

¹⁰⁹ 『臺灣日日新報』「圍箚方圓俱樂部」、D07版、1918/08/01。

¹¹⁰ 漢文『臺灣日日新報』「方圓社設置支部」（原文：撫臺街方圓圍棋俱樂部。前與東京方圓社交涉聯絡，設立支社經得快諾，為兼披露，五日將於弘法寺開圍棋會，已發信通知各所。） D04版、1921/01/05。

¹¹¹ 田健治郎『田健治郎日記/1922-09-18』（原文：朝，廣瀬平治郎（方圓社長）來述方圓社業務擴張之趣旨，請贊助。即約贈與臺灣製磐石一具。）臺灣史研究所，臺灣日記知識庫。



台北囲碁俱楽部（稻澤一郎）

本島棋界の重鎮として知られた稻澤三段は旧ろう官途を辞し今回市内築地町一の十九に台北囲碁俱楽部を設立し、自宅教授並に出張教授をなすこととなった。¹¹²

養気俱楽部囲碁部の囲碁研究会（岡谷章）

養気俱楽部囲碁部に於ては今回囲碁研究会を組織し、最近内地から帰来颯爽として臺灣棋界に登場され謹直端正の内に凄味を持つ新進気鋭の若手棋士岡谷二段を聘する。¹¹³

この記事によると、養気俱楽部囲碁部は日本棋院の二段棋士－岡谷章の来台¹¹⁴をきっかけにして囲碁研究会を組織した。その後、当時の雑誌『臺灣の專賣』には、岡谷章と棋正社から招聘した棋士または台北の棋士との対局に関する棋譜の解説が掲載された。¹¹⁵

新聞に掲載された囲碁組織の成立に関する報道は、常に段位棋士の代表者があり、また、同一の人物が複数の囲碁組織に代表することも可能である。当時の台湾にいた有段者は台湾囲碁界を支えていた存在であり、各々の囲碁に関する記事の中にもよく彼らの名前が出てくる。

¹¹² 『臺灣日日新報』「台北囲碁俱楽部設立」、D02版、1937/01/26。

¹¹³ 石城生「圍碁研究會生る」『臺灣の專賣』（臺灣專賣協會、1938年）、P.108。

¹¹⁴ 鈴木生「圍碁研究會臨時棋戰觀戰記」『臺灣の專賣』（臺灣專賣協會 1938年）。

¹¹⁵ 鈴木生「圍碁研究會月例指導棋戰觀戰記」『臺灣の專賣』（臺灣專賣協會 1938年）。

第四章　日本統治時代の台湾住民の囲碁への評価

以上の分析は大体、社会の風習、行われた活動などの客観的な事実に基づいて論述したが、囲碁自身の魅力にも注目しなければならない。囲碁は中国で四千年前から伝承されてきた芸であり、その中に含まれる哲学的、芸術的な囲碁に関する記述、作品が各時代に残されている。論述に入る前、まず以下の文章から、当時の囲碁に対する観点を垣間見る。

「棋は閑人の手遊びの様に考へて居るものあるが、品性陶冶の為に最上の具で、紳士の嗜みとして、何人も棋を学ぶべきで、要するに棋は人の心の現れとして、心境次第で勝も敗けもすると言ふのはこの事である。」¹¹⁶

囲碁はただの娯楽だけではなく、品性を養うこともできる。「台湾の囲碁界（二）¹¹⁷」の記載にも、囲碁は茶の湯、生花のような正式な作法がある上品な娯楽に分類され、それは上流階級に好まれた。そして、日本の統治者が台湾に来た後、台湾人が統治者である日本人好みに応じ、政治・経済などの現実的な利益を得るべく、囲碁を通してお互いに良い関係を築こうとしたのは有効な手段である。そのほか、稻澤克忠（1938）は囲碁が大衆に歓迎された理由について、以下のように論じている。

斯の如く囲碁が単なる室内遊戯として珍重されるのみでなく、社交的にも国際的にも相当重視され多数大衆に依って、歓迎される所以のものはそこに何等か理由がなければならない。他無し、囲碁が他の遊戯と異り、智的遊戯であると、同時に人生の縮圖であるからであると断言した人さえある。¹¹⁸

¹¹⁶ 寸堂生「圍棋は其時の心境で勝つ」、『台灣棋道』（臺北同好會、1934年）、P.1。

¹¹⁷ 『臺灣日日新報』「台湾の囲碁界（二）」、D04版、1917/01/10。

¹¹⁸ 稲澤克忠「圍碁上達の妙諦」、『臺灣地方行政』（臺灣地方自治協會、1938



また、囲碁は社交的な特性を持っているほか、自身も奥深い娯楽であり、学習者は常に学習する過程に悟った理を自分の人生に応用する。以上は前書であり、本章の第一節で紹介した当時の人々の囲碁に対する感想を見れば、彼らが囲碁を学んだ理由の一端が窺える。第二節では、当時の囲碁に関する詩文及び文化に関する活動を取り上げ、日本統治時代の囲碁に含まれる文学性を明らかにする。そして最後、本章は主に日本統治時代の囲碁文化について論じたが、戦後の動向にも関心を抱くべきだ思われる。当時の新聞「聯合報」と「中央日報」は常に囲碁に関する報道を掲載しており、そこから戦後の台湾囲碁の発展状況が窺える。

第一節 個人が囲碁に対する観点からの分析

この節では、まず囲碁を打っている人の学習過程や、対局で心得た人生に対する考えに注目し、心境の向上に関する文章を例として取り上げる。

囲碁の奥義は一石を下す毎に全局を達観して最善の一手を究めるにある如く、人生も亦其の境遇に順応して最善の手段を講ずるより他に処すべき途はない。¹¹⁹

私は別に専門家ではない、素人の一人であるが、棋といふものを非常に面白く思っている。実に微妙な含みを持ってゐるものと思ふ。打下す石の一つ一つが、計画を含み、性格の片鱗を擔ひ、統率を持って居る。盤面そのものが、人生を彷彿させ、社会相を描き出して居るやうにも観られる。真面目なる棋理の研究は、人間性を完成させる上に、教ふるものが甚多いやうに

年)、P.116。

¹¹⁹ 伴野捨石「囲碁と人生」、『臺法月報』(臺法月報發行所、1933年)、P.110。



以上の記述から見ると、囲碁は単に技術を磨く競技ではなく、個人の性格、気持ちも碁盤に反映される。また、囲碁は確かに2人で行う競技だが、相手に勝とうとするより、「最善の一手」を究める思考の方が囲碁の本質に近いのである。人生もより幅広い視点から見るべきだと思われ、自分の利益（偏り）に注目するだけではなく、社会の全体的な動向（全局）を確認してから行動することで、人生に於ける価値をさらに見出せると考えられる。ようするに、囲碁を学ぶのは、前述の社交的な目的のためだけではなく、自己啓発をしたり、自分が打った碁を鏡にして内省したりすることも、囲碁の活用法だと思われる。中村秀（1935）もこれに関して意見を述べた。

囲碁を戦はす事は、ただ単に時間を面白く過す為めの娯楽ではなく、之により大に精神的修練を積み得るのである。囲碁は盤上の争ではあるが、対局者が精神を込め全力を尽して戦ふのであるから、全く戦争に臨むと同じで充分の覚悟と決心とを要する。¹²¹

日本統治時代は精神を強調する時代であり、その時代は常に戦争が行われていたため、人々は心身の両面において厳しく要求されていた。そして囲碁は策を強調する対戦娯楽のため、囲碁を学習する過程に心得た価値観はその時代に相応しいと思われ、民衆は碁をすることで精神的にも鍛えられると思っていた。中村馬吉（1933）は囲碁の精神を武士道に例え、囲碁は武道又はスポーツと同じく武士道を以て其の精神とし、其の競技を行ふや正々堂々相戦ひ勝のみを思ひ、苟もひ卑怯の行為あるべからぬ。¹²²という視点にもこの論

¹²⁰ 能澤外茂吉「棋道禮讚」、『台灣棋道』（臺北同好會、1934年）、P.1。

¹²¹ 寸堂生「圍棋對戦の秘訣」、『台灣棋道』（臺北同好會、1934年）、P.17。

¹²² 中村馬吉「圍棋講座」、『專賣通信』（臺灣總督府專賣局、1933年）、P.94。

述に支えられるだろう。台湾に渡ってきた日本人は、囲碁を台湾人に伝授すると共に、囲碁に関する思想もそれによって台湾人に影響を与えた。

続いて、日本統治時代に運輸企業を経営していた高雄の豪商である大坪與一も囲碁と関わりがある。大坪與一が辞世した後、中村秀（1935）は彼を記念して著した『大坪與一翁小伝』の中では、囲碁を使って大坪與一の性格を下記のように描述している。

故人には趣味といふものは無かった様だ。強いて挙ぐれば囲碁であらう、併し素より笊碁の域を脱せぬのである。宴会の待ち合わせ中などに、よく黑白を鬭はしてゐるのを見受けた。相手が翁の眼の不自由なのに乘じて、こんな所は気がつくまいと思って、無茶な打ち方を遣ると、盤上の視力は普通の場合と違って非常に鋭いので、忽ち相手の欠陥を見破したものだが、打ち方が何時も攻撃精神に富む所などは、翁の性格の現はれて、之が為め頽勢を挽回して奇勝を博する場合が多かった。¹²³

この論述によると、当時の人々は囲碁を通して人の個性を分析することがあり、前に述べた「碁盤は人の性格を反映する」という論述と合っている。また、上田尚（1922）は、さらにその概念を利用してより系統的、分析的な文章を著した。

姿勢

- (1) .低頭加減の人は思慮はあるが、受動的で統率の才なし。
- (2) .顔を突出し、或いは立膝する人は、大観の明なく、部分的に偏傾し易い。
- (3) .身体をよく動かす人は、気の移り易さか無定見が多い。

¹²³ 中村秀『大坪與一翁小傳』（出版單位不詳、1935年）、P.41。

眼と手

- (1).早打する人は多血質で、進退敏活、殊に能動的であるが、計画の才に乏しく、大勢を挽回するにも、単純な非常手段を用ふる直接行動派に多く見受けられる。
- (2).沈思してビシリと打つ人は、果断にして自信力が強い。
- (3).対手の顔を覗んで、置いた石より指を離さない人は、陰険で盜癖がある。（後略）¹²⁴



上田尚（1922）は都鄙を問はず、人の集まる所、必ず囲碁なきはなしと云ふても過言にあらぬ、此囲碁に就いて、正月のお慰みに其対局に現れる各人の性格鑑定法を実験に基づいて記述しやう¹²⁵という囲碁の愛好者の性格と彼らの打ち方を帰納法で詳しく分析してきた。それによって、囲碁の打ち手は囲碁を通して自分の性格をはつきり見えてくると思われる。前節で述べた吳新栄もこの方法を利用して社交で相手の心理状態を見抜こうとした。

その外、囲碁を学ぶ過程で思考力、観察力もそれによって向上できるし、碁盤上で急速に変化し続けるため、碁を打っている過程で計算、判断を繰り返さなければならない。劉家榆（1934）は以下のようにこのことについて論述している。

定石の局面に対する秘奥は、それが各々一定不易の理則を持って居ると云うことも悟りました。即ち定石になる以上は、必ず其の通り着手しなければならない筈であって、苟も一着に於て誤って居る以上は局部ばかりでなく全体に著しい変化が出てきて時によつては、一着の錯誤が全局の利害に關係して来るものであります。民国の古書に所謂『御使人敬。射使人恭。奕使

¹²⁴ 上田尚「對局に現はれる碁客の性格」、『實業之臺灣』（實業之臺灣社、1922年）、P.29。

¹²⁵ 同上。

人慎。』が即ち之れであると思ひます。¹²⁶



中国では、囲碁は戦争を模擬するため発明された道具という説がある。日本統治時代と中国古代の時代背景は異なるが、戦争によって不安定な時代になったことは共通点であり、この環境に生きていた人々は冷静的、思考的な素質が求められていた。その点において、囲碁は精神を鍛える良い道具だと思われる。

一方、当時の囲碁のイメージは大体良い趣味だと思われたが、碁を打っている人が品性のいい人だとは限らない。例えば、1934年に『台灣棋道』の創刊号の雑誌に「打ち直す」に対する批判に関する文章がある。

(前略) 一つ一つ石をおろす、そのあらゆる度毎に「あっ」と声をあげないやうにしなければならない。苟も対局に際し石が手から離れ、盤面に置かれたが最後、それがこの世の別れでなければならない、如何に悪手である事に気づいたとしても、再び手に戻るべきものでない。けれども棋でなどもそれが実行されない。手近に石があるせいかもしれないが、悪手と気がつけはすすぐ取り返して打ち直す。甚しいのになると敵の打った石を二目も三目を取り除いて打ち直す。所謂殿様棋なるものもある。(中略) 充分考慮して誤ち無きを見極めて打ち直さなければならない。¹²⁷

作者は「打ち直し」という行為を非難して、そしてそれを禁止するのは「中々実行されない。」と言っている。しかも、その行為をする人は恥ずかしいと思っておらず、まだ相手が打たないから差支へ

¹²⁶ 劉家榆「圍棋を学ぶ動機と感想」、『台灣棋道』（臺北同好會、1934年）、P.19。

¹²⁷ 稲澤生「あっと云つたが此の世の別れ」、『台灣棋道』（臺北同好會、1934年）、P.23。

ないなどと勝手な事を云ふて、平然として打ち直しをやる。つまり、台湾の囲碁界では「打ち直し」は中々見慣れた行為だと考えられる。

「打ち直し」以外に、賭け碁もあった。増川宏一（2006）によると、すべての遊戯に共通する普遍的な性質は、勝負に賭けられていたことである。遊戯の歴史は、勝敗の決まる遊びには常に賭けられていたことを明らかにしている。そのことによって遊びの興味が増やしていたといえる。¹²⁸

中国では、囲碁は昔から賭け事と関わりがある。清朝は中国の囲碁文化が盛んな時期であり、数多くの囲碁の国手が育った。彼らは大体賭け碁で生活を維持し、一般の民衆が囲碁をした時も常に金銭を賭けていた。¹²⁹よって、中国から台湾へ伝來した囲碁文化には、元々「賭け事」の性質が備わっていたと推測できる。

日本統治時代の台湾では、法律で賭け事を禁じていたにも関わらず、賭け碁がたびたび行われていた。¹³⁰確かに麻雀、花札のように、囲碁もよく賭け事に使用して検挙されていたが、盤上に鳥鷺を戦わせ之に賭けるのは中々確証が挙がらない。¹³¹それに関する報道も若干ある。その一例として、嘉右衛門という老人の賭け碁の過程が報道されている。

嘉右衛門といふ老人、囲碁が三度の食事よりも好きで、親の死目にも遇えぬといふ位に熱中する方であったが、其の技倅に至っては所謂笊碁の域を脱する事が出来なかった。近頃中々手が上がったと褒められるのに逆せ上ってそろそろ賭碁をやり出し、家族の注意も聞かばこそ毎日外出しては敗けて帰るというふ始末、噂に上らぬ譯はない。遂に刑事の耳に入り内偵中とも

¹²⁸ 増川宏一『遊戯－その歴史と研究の歩み－』（法政大学出版局、2006年）、P.149。

¹²⁹ 郭雙林、蕭梅花『中國賭博史』（文津出版社、1996年）、P.247。

¹³⁰ 『臺灣日日新報』「古今賭筭夜話」、D04版、1937/08/06。

¹³¹ 『臺灣日日新報』「賭筭の一昧南署の手で検挙臺北では最初の捕物」、D02版、1936/11/13。

知らずして某日附近の田舎初段と言われて居る久右衛門の座敷で、差し對ひになって夢中で白黒合戦の最中刑事に検挙されて取調の後送致され、各々罰金処分を受けたと言ふのである。¹³²



記述のように、嘉右衛門は囲碁に非常に熱中していて、よく打っていたが中々上手にならなかった。しかし、他人は彼のその性格を利用して、賭け碁に嵌まるように仕向けた。日本統治時代のこまごまとした記事により、囲碁を利用した賭けは少なくなかった現象だと考えられる。そして、民国年代から台湾でさまざまな「棋社」が開かれ、賭け碁をする風習が次第にになり、それは日中両方ともに影響をもたらしたと考えられるが、中国では賭け碁が明らかに日本より流行っていたため、中国からの影響の方が強かったと思われる。

戦後の棋社の設立は、元々は囲碁界の人気を集めることができ、囲碁の発展にとって良いことになったはずだが、台湾の棋社は中国の「茶館」のようになってしまい、教育の機能が失われ、商売目的となつた。(中略) 上手な打ち手が棋社で碁を打つ時、指導碁をするのではなく、誰も指導費を支払わなかつたため、金銭を賭けることになった。棋社の賭け風習は囲碁の社会的地位を傷つけ、囲碁の発展と推進に直接影響を与えた。¹³³

第二節 囲碁に含まれる文学性

琴棋書画とは、古来より中国の四芸に属し、文人に好まれている。この四芸の中では琴、書道、絵画が徐々に審美活動へと発展していくが、囲碁は「競技」、「娯楽」の性質が強まつていったのである。では、囲碁はどのようにして「芸」と繋がり、日本統治時代の囲碁は芸にどの表現をしていたかについてが、本章の論述の軸である。中国の明、清の時期には、囲碁の棋士は高いレベルに辿り着き、

¹³² 藤木親壽「囲碁と賭博」、『警友』（新竹州警察文庫、1933年）、P.47。

¹³³ 李敬訓『圍棋史話 Vol.2 三三、星、天元』（鳴祝出版社、2012年）。

その時代の官員、文人は全く対抗できなかった。よって、彼らは囲碁の勝負を避け、囲碁を品性を養うもの、あるいは、哲学の範疇へ持つていったのである。中国の囲碁は勝負の碁と芸術の碁に分かれているが、唐の時代からその傾向が少し現れ、明、清の頃にはすでに分化していたのである。¹³⁴

中国の伝統詩人にとっては詩を詠む以外に、碁を打つことも備えるべき修養の一種であり、詩人たちが互いに切磋琢磨しあう媒介にもなっている。全臺詩のデータベース¹³⁵を検索してみると、囲碁をテーマにして詩を作った文人は清末から日治にわたって、許夢青、黃茂清、鄭鵬雲、林朝崧、林仲衡、葉文樞など何人もいた。清朝の台灣の文人は、大体が官員を務めた上位者に限られたが、日本統治時代に入ると、文学の概念が徐々に台灣に導入され、おまけに新聞など文字の媒介が増えたため、台灣の文学に関する団体も多く設立されるようになった。そのうち「櫟社」¹³⁶詩人である林仲衡は囲碁に熱心で、常に日暮れまで弟の林子佩と囲碁を打っていた。また、『圍棋偶成』、『圍棋感作』などの囲碁の詩作も残っている。そして、林獻堂、林幼春、林仲衡、莊嵩などの文人も囲碁の愛好者であり、それを通して日本の官員と交流していた。¹³⁷囲碁は中国の歴史の中で多くの寓話や物語が残っている。そして、動乱が頻繁に起きた清朝統治時代の台灣では、囲碁は知識階級にとってもう単純な娯楽ではなく、冷静沈着に世を対処する修養にもなっていた。¹³⁸日本統治時代の台灣詩人も囲碁を題材にして詩を詠むことがあり、その内容を分析すれば、彼らの心境、および中国で伝えられたさまざ

¹³⁴ 何云波『弈境』(北京大學出版社、2006年)、P.29。

¹³⁵ 国立台灣文学館が作成した、明から日治までの台灣詩人の作品が収録されているデータベースである。<http://xdcm.nmtl.gov.tw/twp/b/b02.htm>

¹³⁶ 日本統治時代の三大詩社の一つで、その中で一番評判性が高い。台灣中部の詩人たちが組織したものである。

¹³⁷ 林毓嵐「日治時期臺灣傳統詩人的休閒娛樂－以櫟社詩人為例」、『臺灣學研究』(2009年)、P.61。

¹³⁸ 陳文松「日治臺灣圍棋史初探：從東方孝義的觀察談起」、『南瀛歷史、社會與文化 IV：社會與生活』(臺南市政府文化局發行、2016年)。

ま囲碁に関する寓話との繋がりが窺える。



王質－爛柯囲碁

黑白茫然溷一枰，心關對策手談兵，
怪他最是旁觀者，濫到樵柯不繫情。¹³⁹

爛柯囲碁とは、「晋の時代に王質という木こりが山にやってくると、そこで何人の子供が碁を打っていた。王質は局を見物していたが、子供に言われて斧の柄がぼろぼろに爛れていることに気づき、村に戻るとすでに百年以上経っており、知っている人は誰もいなくなっていた。」という話である。

中国の囲碁史では、「爛柯」が間違いなく代表的な寓話であり、その話は囲碁の変化が無限であることや、対局者が夢中になっている様子を大げさに表現している。¹⁴⁰

謝安－賭墅圍棋、東山高臥

賭墅東山對一枰，手兵猶似奕蒼生，
盤中未定輸贏局，將左兒曹報結兵。¹⁴¹

これは謝安の物語である。その時期、華北を統一した前秦の苻堅は中国の統一を目指して大軍を率いて南下した。戦いの前、謝安と甥の謝玄は別荘を賭けて碁を打っていた。謝玄の棋力は元々謝安より上手だったが、戦争近づいているせいで平常心を失ってしまって負けた。その後、謝安の冷静さはこの話とともに後世に伝えられた。

¹³⁹ 詞宗左卧雲，右梅魂先生「圍棋」、『鷗盟』（鷗盟、1936年）、P.15。

¹⁴⁰ 殷偉『趣話圍棋的故事』（知書房出版社、2004年）、P.19。

¹⁴¹ 詞宗左卧雲，右梅魂先生「圍棋」、『鷗盟』（鷗盟、1936年）、P.16。

帝堯造棋



堯帝神機創製工，於今世上一枰同，
手談勝負何須問，黑白紛紛轉局中。¹⁴²

中国神話に登場する君主である堯は、民を救う良い君主であったが、息子の品性が悪くてどうにもならなかった。その後、彼は囲碁を発明して、息子に教えるようになった。¹⁴³

ほかには、南宋の詩人－趙師秀の詩「有約不來過夜半，閒敲棋子落燈花。」をまねた作品があり、文人の寂しさを表している。

橘叟傳來分外奇，兵談紙上對虯枝，
一枰共校濤聲壯，兩敵相攻雲影披。
樹子乍拋同奕處，燈花已落坐敲時，
羨他羅漢留餘地，省似人間局局移。¹⁴⁴

北宋の政治家－蘇軾の物語を引用して、囲碁を好む気持ちを表した作品もある。

一局敲來兩意同。排成黑白類兵戎。
憐余素有蘇張癖，學得縱橫到夜終。¹⁴⁵

また、囲碁は盤面の領地を争う、まさに戦争そのものであり、囲碁を戦争に例える詩が多く、古くから有名な戦事、中国史の知名軍師などが詩に出てくる。

¹⁴² 劉聯璧、陳麗山 選「圍棋」、『詩報』(吟稿合刊詩報社、1937年)、P.16。

¹⁴³ 殷偉『趣話圍棋的故事』(知書房出版社、2004年)、P.2。

¹⁴⁴ 葉文樞、張純甫 選「松下圍棋」、『詩報』(吟稿合刊詩報社、1938年)、P.13。

¹⁴⁵ 劉聯璧、陳麗山 選「圍棋」、『詩報』(吟稿合刊詩報社、1937年)、P.16。

黑白如同楚漢爭，攻城掠地逞奇兵。

多君妙手安天下，結局終須一著贏。¹⁴⁶



そして、詩の雰囲気から見ると、勝負をつける意識が強く知恵を絞ってどうにかして勝とうとするという、積極的な気持ちが伝わってくる作品がある。

爭雄決勝兩心同，對壘方圓興未終。

為欲消閒寮遣此，神機鬥盡守還攻。¹⁴⁷

一方、囲碁をのんびりとした趣味と見なし、世の中のことはおいて囲碁に専念する消極的な気持ちが伝わってくる作品もある。

鎮日消閒黑白爭，藏機等計鬥殘更。

管他大陸風雲急，局裡乾坤好縱橫。¹⁴⁸

以上の詩の内容から、日本統治時代の台湾での囲碁に関する詩文には、中国から伝承された文化の印象が残っており、文中には中国の寓話が含まれていることが分かる。作者の背景から見ると、林臥雲（1881-1965）は嘉義人であり、1905年、嘉義で初めての台湾人医師になった。彼は数多くの詩社に参加し、趣味には生け花、囲碁などがあった。¹⁴⁹また、葉文樞（1876-1944）は清代の文人であり、当時の漢詩界で名高く、新竹で漢学を教授していた。¹⁵⁰二人とも台湾人の知識階級であるが、林臥雲は日本式の医学教育を受けたに対して、葉文樞は台湾の伝統的な文人に属したのである。日本人の同化政策の中であっても、当時の詩が中国風を保っていたこ

¹⁴⁶ 詞宗左臥雲，右梅魂先生「圍棋」、「鷗盟」（鷗盟、1936年）P.15。

¹⁴⁷ 劉聯璧、陳麗山選「圍棋」、「詩報」（吟稿合刊詩報社、1937年）、P.16。

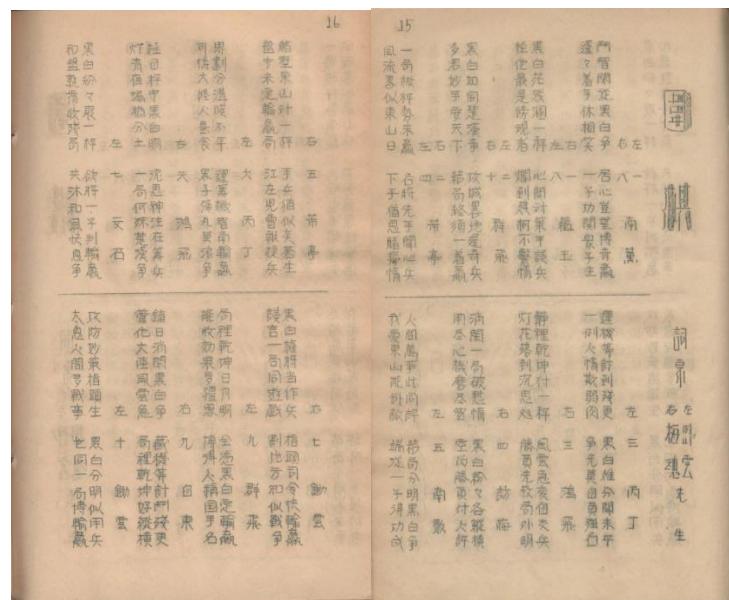
¹⁴⁸ 詞宗左臥雲，右梅魂先生「圍棋」、「鷗盟」（鷗盟、1936年）P.16。

¹⁴⁹ “林臥雲”智慧型全臺詩知識庫 <http://xdcm.nmtl.gov.tw/twp/b/b02.htm>

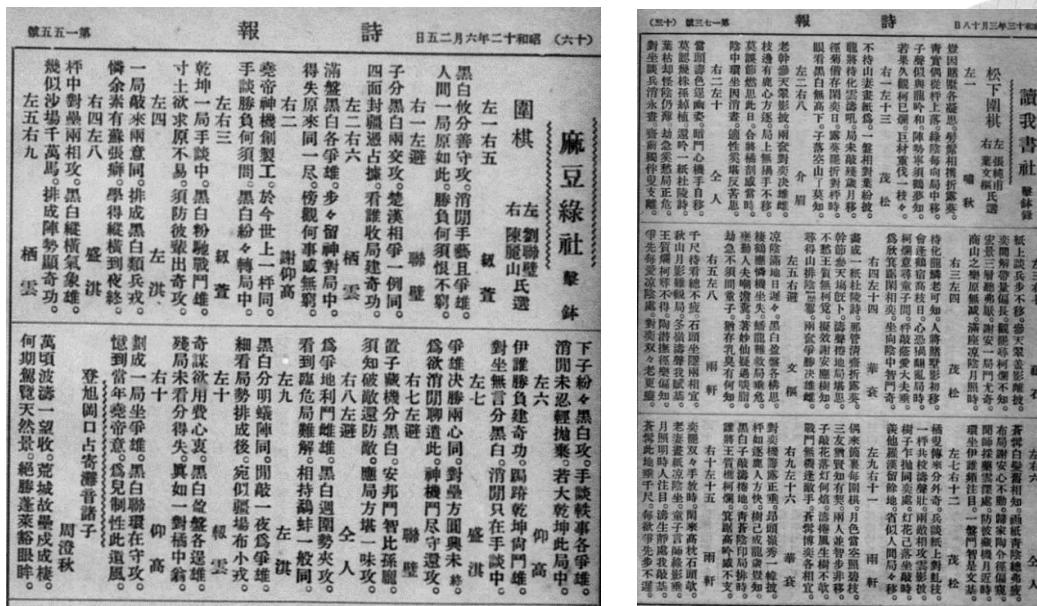
¹⁵⁰ “葉文樞”智慧型全臺詩知識庫 <http://xdcm.nmtl.gov.tw/twp/b/b02.htm>

とが分かる。

中国は古代から囲碁をテーマにして詩を詠むことが多く、その作者の価値観及び美に対する趣が表れている。碁盤では、黒石と白石が混ざり、陰と陽が互いに動き出し、美しい画面を形成する。碁を打つ過程では、碁石を通して心象や風景を描き、自分の感情を込め、美しいリズムを求めるのである。たしかに当時の台湾文人は日本人が押し広めた囲碁の打ち方や制度を認めたが、伝統的な中国式の囲碁文化に誇りを持っていて、完全に日本の囲碁文化を同化させないように努力したと感じられる。



図十五、詞宗左卧雲、右梅魂先生「圍棋」、『鷗盟』(出所：鷗盟 1936 年)、P.15-16



図十六（左）、劉聯璧、陳麗山 選「圍棋」『詩報』（出所：吟稿合刊詩報社、1937年）、P.16

図十七（右）、葉文樞、張純甫 選「松下圍棋」『詩報』（出所：吟稿合刊詩報社、1938年）、P.13

第三節 戦後初期との繋がり

1949年、中国国民党政府が台湾に撤退した際、中国の茶館で囲碁を打っていた打ち手もともに台湾に来た。その成員には中国囲碁会の要員も含まれ、彼らは台湾で「中国囲碁会」を設立した。「囲碁の家」、「黑白棋社」、「弈園」などの棋社も引き続き台北で開かれ、そして台中、台南、高雄などの地域でも棋社が出てきた。¹⁵¹戦後の台湾囲碁界というと、周至柔将軍について避けては通れない。1953年、「中国囲碁社」は「中国囲碁会」へ再編成され、周至柔¹⁵²が初任会長を務めていた。当時彼は参謀総長を務めていたため、台湾の政界に大きな影響力を持っていた。台湾の多くの政府要員が囲碁を好むことも、彼の広めたことと関係がある。

¹⁵¹ 李敬訓『圍棋史話 Vol.3 昭和棋聖吳清源』（鳴祝出版社、2012年）、P.253。

¹⁵² 1899-1986、最終階級は陸軍一級上将、初代空軍総司令に就任した。中華民国空軍官網 <https://air.mnd.gov.tw/Webpage.aspx?entry=249&ref=503>（参照 2018-05-24）。

日本統治時代に活躍していた台湾人は、戦後もたまに新聞に掲載された。例えば、1951年に台中で囲碁会が設立され、林献堂の息子である林培英や『臺灣碁客銘鑑』の十一級の呉滄沛が幹事に就任した。¹⁵³『臺灣碁客銘鑑』に名前のある人の中では、ほかには林來癸四級が中国囲碁会屏東分会の委員になった。¹⁵⁴台南の林金獅二級は初段に上がり、台南市の囲碁発展を主導して¹⁵⁵嘉義の全縣第一回囲碁大会でも審判を務めた。¹⁵⁶また、日本統治時代の台湾で活躍していた四段棋士一橋本国三郎は終戦とともに日本に戻ったが、その後も交流を続けた。1954年、彼は息子である橋本昌二六段棋士とともに台湾を訪問した。中国囲碁会は盛大に彼らを迎え、台湾の知名棋士である呉滌生、張恆甫、黃水生、周傳弼、唐景賢を代表にして中日囲碁交流試合を行った。このことからみると、日本統治時期の囲碁界で活躍した台湾人、日本人の一部は、戦後も台湾の囲碁界で尽力していたのである。

1952年、呉清源が藤沢庫之助九段と『読売新聞』が主催した十番碁を打ったことは、台湾囲碁界で非常に関心を集めた。何千名の囲碁のファンは、新聞またはラジオでその対局の結末を知りたがっていた。そのファンの中には、現役の陸軍大将、退役した政治家及び各階層の人物がいた。台北市の新生商場の新生茶室に、呉清源と藤沢庫之助の第一局の棋譜が置かれていた。囲碁の爱好者たちが日々その棋譜を研究し、呉清源の兄の呉滌生もその棋譜の傍で弟の絶妙な一手を考え込んでいたのである。¹⁵⁷そして同年、呉清源は日本棋院の初段女棋士一本幸子¹⁵⁸と台湾を訪問して、台湾の囲碁の打ち手に指導碁をした。呉清源の来台時、中国囲碁界理事長の周至柔、

¹⁵³ 『聯合報』03版 1951/12/10。

¹⁵⁴ 『聯合報』05版 1952/02/19。

¹⁵⁵ 『聯合報』02版 1952/08/10。

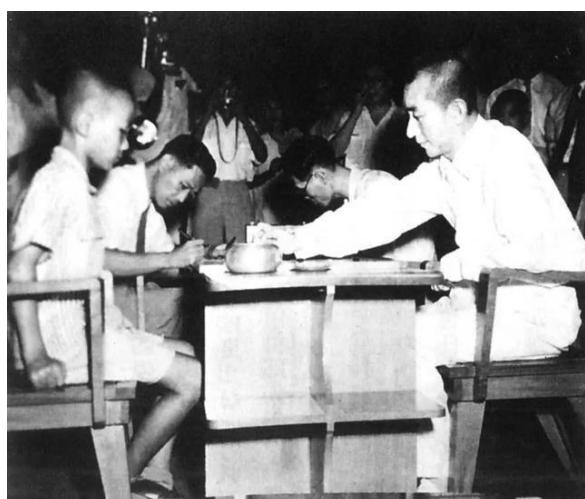
¹⁵⁶ 『聯合報』06版 1952/07/29。

¹⁵⁷ 『中央日報』「圍棋聖手呉清源-與呉滌生談世界棋壇爭霸戰」第4版/文教新聞 1951/10/21。

¹⁵⁸ 1930年生、日本棋院東京本院七段棋士、木谷實九段に入門、第1期女流本因坊。日本棋院サイト：<https://www.nihonkiin.or.jp/player/htm/ki000105.html>（参照 2018-05-09）

白崇禧將軍が主催した歓迎会が台北の中山堂で盛大に行われ、呉清源に「囲碁大国手」の称号を与えた。¹⁵⁹

呉清源は台湾の実力者と打つ際、大体三子、四子を譲らせた。そして、初段の本田は互先で台湾棋手に三局負けた。よって、台湾囲碁のトップの実力は大体日本の二、三段ぐらいだったと言える。現在の日本棋院所属の知名棋士である林海峯¹⁶⁰は当時 11 歳で、呉清源に六子で指導碁を打ってもらう機会を得た。結果は一目負けだったが、呉に才能を認められて日本へ赴いた。¹⁶¹



図十八、呉清源と林海峯が六子で指導碁をしている様子。

呉清源の台湾訪問は短い時間だったが、彼は当時の台湾で唯一トップ日本棋士に対抗できる棋士であり、台湾囲碁界を代表する象徴とも言える。そして、彼の弟子林海峯も日本の囲碁界で大活躍しており、台湾の囲碁界に大きな影響を与えた。現在台湾にある主要な囲碁組織「海峯棋院」も、彼と企業家の林文伯が共に設立したものである。日本統治時代末期から戦後初期にわたって、台湾に住んでいた日本人はほぼ強制的に日本に送還されたが、彼らが台湾で築い

¹⁵⁹ 『聯合報』02版 1952/07/19。

¹⁶⁰ 1942 年生、日本棋院東京本院九段棋士、故呉清源九段門下、名誉天元。
日本棋院サイト：<https://www.nihonkiin.or.jp/player/htm/ki000009.html> (参照 2018-05-09)

¹⁶¹ 『聯合報』02版 1952-08-12。

た囲碁に関する礎は、台湾人及び中国から渡ってきた中国人が受け継いで発展させていったのである。



結論

本論文の分析を通じて、以下のような結論が得られた。台湾囲碁の普及については、日本統治時代は確かに基礎を固める大事な時期であり、日本から渡って来た日本人の棋士または囲碁愛好者が重要な役割を果たしていた。台湾囲碁界に大きな貢献をした日本人は田村達太郎、木下新三郎、安達久三、稻澤一郎などの日本棋士で、彼らは棋院の経営や、囲碁競技会の開催、資金の出資、新聞・ラジオを通した囲碁の宣伝、週刊誌の発刊など、さまざまなことをして台湾で囲碁を押し広めていった。囲碁組織は、およそ政府機関、学校、会社、一般の囲碁会、地域分けの囲碁会の五つの種類に分けられる。囲碁を普及するために設立された囲碁組織のほか、単純に同好者を集めて交流する囲碁組織もある。

当時の囲碁は上品な娯楽だとされ、一般の民衆が象棋をしたのに対して、囲碁を打つ台湾人は中産階級以上の地位を持つ人が多かった。台湾人の著名な囲碁愛好者には、林献堂、徐杰夫、陳天賜、黃水生、呉新栄などがあり、陳天賜と黃水生は戦後に囲碁教室を開き、日本統治時代の囲碁文化の伝承者として戦後の囲碁界で活躍し続けた。そして、林献堂は霧峰一新会で囲碁会を設立して先生を招聘したほか、囲碁に関する活動にもよく出資していた。また、徐杰夫は段位棋士でありながら、嘉義区長にも務めている。嘉義の台湾人が囲碁に大変熱心だったのは、彼と深く関係があると思われる。今まで挙げた例と統計の資料から、日本人が囲碁を台湾で宣伝したことは、台湾人に抵抗なく受容されたものと思われる。

そのほか、当時の日本も積極的に海外に棋士を派遣しており、日本棋士の高部道平、岩佐鉢、井上孝平、赤岩嘉平、呉清源、田村保壽（本因坊秀哉）、木谷実などの著名棋士は引き続き臺灣へ囲碁を指導しに来た。特に日治後期に来た呉清源、田村保壽、木谷実は当代の代表棋士であり、彼らが台湾を訪問することは、台湾の囲碁界は段々盛んになった証拠とも言える。確かに短期間の交流で台湾囲碁界の実力を上げるのは困難だが、報道を通じて囲碁を民衆

に宣伝する効果は大きかったと考えられる。

『臺灣碁客銘鑑』によると、台湾囲碁の普及は台湾全土に広がっていき、特に台北に集中している。それは町の人口と経済は囲碁学習者の人数に影響すると推測できる。一方、囲碁を打つ台湾人の比率から見ると、澎湖、台南、台中は他の県市と比べて遥かに高い。このことは、澎湖の場合は清朝時代にもたらされた文人風習と関係があると考えられ、台南と台中はそれぞれ段位棋士の陳天賜、嘉義区長の徐杰夫、民族運動指導者の林献堂のような影響力が高い台湾人の囲碁愛好者がいたからである。また、『高雄州碁客銘鑑』と『臺灣碁客銘鑑』を比較した結果、『臺灣碁客銘鑑』に収録されていなかった囲碁学習者はまだ他にも多くいると思われる。1935年の『臺灣碁客銘鑑』が統計した台湾の囲碁学習者の総数は4366人だったが、実際は既に1万人を超えていたと推測できる。

囲碁学習者の性別については、当時の日本では囲碁を打っていた人はほぼ男性だったが、喜多文子を中心に囲碁を研究していた女性たちもいた。日治以来、台湾の女性の地位は徐々に向上していき、社会で仕事をする女性も増えたが、囲碁を打っていた記載はほぼ残っていない。このことから見ると、台湾で囲碁を打っていた人は大体男性だったと推測できる。

日本統治時代の人々が囲碁を打つ目的には娯楽、社交、精神の鍛錬や修養などがあり、冠婚葬祭のような文化の面でも囲碁が現れた。日治の台湾は娯楽が制限され、囲碁は当時政府が認めた数少ない上品な嗜みだと思われ、中産階級に好評を受けた。つまり、日本統治時代の台湾における囲碁文化は、日本の政府と民衆が一丸となって力を入れて押し広めた成果であり、台湾人にも深く受容され、台湾に広がっていたのである。その成果と文化は戦後にも引き継がれ、台湾の囲碁界に大きな影響をもたらした。

一方、日本統治時代に詩社文化は次第に盛んになっていき、囲碁に関する詩文が発表された。その内容は中国で伝わる囲碁の歴史的な寓話と深く関係があり、詩人の気持ちが込められている。たしか

に台湾囲碁の制度は日本の「級段制」へ発展していったが、台湾の文人の囲碁に対する感情は、中国の伝統的な修養に近いと窺える。

そして、黃水生、林培英、呉滄沛、林來癸、林金獅などの日本統治時代に出現した囲碁に関する人物は、戦後も台湾の囲碁界で活躍していた。当時台湾に渡來した橋本国三郎は、戦後日本へに戻っても、息子の橋本昌二六段とともに台湾囲碁界と交流し続けた。そして、戦後に中国囲碁界の要人が台湾に来て「中国囲碁会」を設立し、多くの棋社を開いた。当時の人は、囲碁を「芸」として、上品な娯楽だと思った人もいれば、賭け碁を中心囲碁を打った中国の棋社文化だと思った人もいた。要するに、戦後の台湾囲碁文化は、中国、日本の二つの囲碁文化が融合した産物だと言える。また、当時同じく日本に統治され、現在囲碁が盛んな韓国についても、本論文の研究方法で当時の発展の過程や文化交流の内容を明らかにすることができると思われる。今後の研究課題に譲る。



参考文献

單行本：

- 中村秀（1935）『大坪與一翁小傳』（出版單位不詳）、P.41。
- 田村達太郎（1935）『臺灣碁客銘鑑』臺灣碁客銘鑑編輯會。
- 肥後仲之助（1938）『高雄州碁客銘鑑』。
- 郭雙林、蕭梅花（1996）『中國賭博史』（文津出版社）、P.247。
- 殷偉（2004）『趣話圍棋的故事』（知書房出版社）、PP.2-19。
- 何云波（2006）『弈境』（北京大學出版社）、PP.12-29。
- 增川宏一（2006）『遊戲－その歴史と研究の歩み－』（法政大学出版局）、PP.69-149。
- 黃慧貞（2007）『日治時期臺灣「上流階層」興趣之探討－以『臺灣人土鑑』為分析樣本』（稻鄉出版社）、PP.176-177。
- 李敬訓（2012）『圍棋史話 Vol.2 三三、星、天元』（鳴祝出版社）、P.191。
- 李敬訓（2012）『圍棋史話 Vol.3 昭和棋聖吳清源』（鳴祝出版社）、P.253。

日記：

- 田健治郎『田健治郎日記』臺灣史研究所 臺灣日記知識庫
- 林獻堂『灌園先生日記』臺灣史研究所 臺灣日記知識庫

論文：

- 許雪姬（2009）「樓臺重起（上編）——林本源家族與庭園歷史」（臺北：臺北縣政府、2009年）。
- 林毓嵐（2009）「日治時期臺灣傳統詩人的休閒娛樂－以櫟社詩人為例」、『臺灣學研究』、P.61。
- 江寶釵、謝崇耀（2010）「從瀛社活動場所觀察日治時期台灣詩社區的形成與時代意義」、『中國學術年刊』第三十二期（春季號）、P.214。
- 翁聖峰（2010）「日治時期職業婦女題材文學的變遷及女性地位」、『台灣學誌』創刊號、P.2。
- 陳文松（2016）「日治臺灣圍棋史初探：從東方孝義的觀察談起」、臺南市政府文化局發行『南瀛歷史、社會與文化 IV：社會與生活』、

PP.246-263。

陳文松（2016）「臺灣圍棋發展史上的擺渡人：從沈光文、田村達太郎到吳清源」、『高雄師大學報』第四十二期、PP.33-40。

陳文松（2016）『從躲空襲到避政治：日治後期到戰後初期吳新榮的圍棋戲』、中央研究院臺灣史研究所、PP.135-150。



雜誌、新聞：

『聯合報』

『臺灣日日新報』

『漢文臺灣日日新報』

作者不詳（1916）「碁界-仙遊会と緣起」、『運動と趣味』、台灣体育獎勵会、P.52。

作者不詳（1916）「四段の碁客としての田村達太郎氏」、『新臺灣』、神戸支局新臺灣社、P.56。

烏鵲生（1918）「通信局の碁天狗連」、『臺灣通信協會雜誌』臺灣通信協會、P.49。

作者不詳（1918）「藝苑消息」、『新臺灣』、新臺灣社、P.18。

上田尚（1922）「對局に現はれる碁客の性格」、『實業之臺灣』、實業之臺灣社、P.29。

藤木親壽（1933）「圍碁と賭博」、『警友』、新竹州警察文庫、P.47。

伴野捨石（1933）「圍碁と人生」、『臺法月報』、臺法月報發行所、P.110。

中村馬吉（1933）「圍棋講座」、『專賣通信』、臺灣總督府專賣局、P.94。

稻澤生（1934）「あっと云ったが此の世の別れ」、『台灣棋道』、臺北同好會、P.23。

劉家榆（1934）「圍棋を学ぶ動機と感想」、『台灣棋道』、臺北同好會、P.19。

稻澤一朗（1934）「圍棋私見」、『台灣棋道』、台北同好會、P.4。

蒲原明（1934）「昭和模範棋」、『台灣棋道』、台北同好會、P.23。

古城丈夫（1934）「棋客の本分」、『台灣棋道』、台北同好會、P.1。

古城丈夫（1934）「専門家と素人」、『台灣棋道』、台北同好會、P.1。

- 古城丈夫 (1934)「台北同好会成立の経過とその事業」、『台灣棋道』、台北同好会、P.28。
- 作者不詳 (1934)「棋界往來」、『台灣棋道』、台北同好会、P.31。
- 作者不詳 (1934)「棋界ニュース」、『台灣棋道』、台北同好会、P.32。
- 寸堂生 (1934)「圍棋は其時の心境で勝つ」、『臺灣棋道』、臺北同好會、P.1。
- 柴山文吾 (1934)「JFAK ラヂオ放送圍棋講座」、『台灣棋道』、台北同好会、P.10。
- 能澤外茂吉 (1934)「棋道禮讚」、『台灣棋道』、台北同好会、P.1。
- 真佐美 (1934-1935)「趣味の話 蓦將棋聯珠」、『臺灣』、臺灣通信。
- 紗琴迷 (1935)「始政四十周年記念博覽會」、『臺灣』、臺灣通信社、P.79。
- 作者不詳 (1936)「名人招聘圍碁研究會」、『專賣通信』、臺灣總督府專賣局、P.100。
- 碁狂生 (1938)「臺北市公會堂に於ける春季圍碁大會を觀る」、『臺灣地方行政』、臺灣地方自治協會。
- 稻澤克忠 (1938)「圍碁上達の妙諦」、『臺灣地方行政』、臺灣地方自治協會、P.116。
- 石城生 (1938)「圍碁研究會生る」、『臺灣の專賣』、臺灣專賣協會、P.108。
- 鈴木生 (1938)「圍碁研究會臨時棋戰觀戰記」、『臺灣の專賣』、臺灣專賣協會。
- 白土義雄 (1939)「圍碁の常識 (二)」、『臺灣鐵道』、臺灣鐵道協會、P.45。
- 作者不詳 (1939)「五人拔棋戰」、『臺灣地方行政』、臺灣地方自治協會、P.152。
- 青楠散人 (1940)「鹽腦課圍碁大會戰記」、『臺灣の專賣』、臺灣專賣協會、P.57。
- 駄無羅子 (1942)「臺東圍碁天狗會漫記」、『臺灣之專賣』、臺灣專賣協會、PP.78-79。



サイト：

日本大百科全書, JapanKnowledge,

許饒和口述 / 張曉茵整理 〔台灣棋話 1〕台灣的日本圍棋

<http://www.saigo.com.tw/page8.php?viewnum=66> 瀏覽日期：

2018/03/09

臺灣史研究所－「臺灣日記知識庫」

<http://taco.ith.sinica.edu.tw/tdk/%E9%A6%96%E9%A0%81>

日治時期期刊影像系統

<http://stfj.ntl.edu.tw/cgi-bin/gs32/gsweb.cgi/login?o=dwebmge&cache=1519994121717>

台灣日日新報データベース

<http://140.112.115.15/ddnc/ttsddn?@2:1192370467:0:::-1#JUMPOINT>

日治時期図書影像系統

<http://stfb.ntl.edu.tw/cgi-bin/gs32/gsweb.cgi/login?o=dwebmge&cache=1519994385534>

ジャパンナレッジ

<https://japanknowledge.com/>

日本棋院

<https://www.nihonkiin.or.jp/>

智慧型全臺詩知識庫

<http://xdcm.nmtl.gov.tw/twp/b/b02.htm>

年表



新聞資料整理



年代	內容說明	參考資料
1908/11/26	碁會詳報	漢文台灣日日新報
1909/06/20	涼榻閑話 箕伯 田村達太郎 氏 (上)	台灣日日新報
1909/06/22	涼榻閑話 箕伯 田村達太郎 氏 (下)	台灣日日新報
1909/07/18	圍碁大會	漢文台灣日日新報
1909/08/20	臺北圍碁會	台灣日日新報
1909/09/12	臺銀俱樂部圍碁小會	台灣日日新報
1909/09/19	入段披露	漢文台灣日日新報
1909/09/23	披露會況	漢文台灣日日新報
1910/11/20	高部道平が南京へ	漢文台灣日日新報
1911/01/20	新評林／來碁伯	漢文台灣日日新報
1911/01/21	全島圍碁大会	台灣日日新報
1911/11/18	高部道平四段來台	漢文台灣日日新報
1911/11/20	新評林／圍碁會	漢文台灣日日新報
1912/10/01	最近の澎湖島 第一回の圍碁會	台灣日日新報
1914/01/13	圍碁大會盛況	台灣日日新報
1915/01/09	齋藤賢徳碁客の來遊/警務課の新年碁会	台灣日日新報
1915/01/11	齋藤賢徳碁客來臺	台灣日日新報
1915/10/15	嘉義圍碁盛況	漢文台灣日日新報
1916/06/05	臺灣碁客銘鑑紹介	漢文台灣日日新報
1917/01/07	田村氏の圍碁会	台灣日日新報
1917/01/09	本島の圍碁界 (一)	台灣日日新報
1917/01/10	台灣の圍碁界 (二)	台灣日日新報
1917/01/14	台灣の圍碁界 (五)	台灣日日新報
1917/01/19	台灣の圍碁界 (三)	台灣日日新報
1917/12/25	仙友會紹介	台灣日日新報
1918/02/12	臺灣圍碁會成る	台灣日日新報

1918/03/12	臺灣圍碁會賬がな發會式	台灣日日新報
1918/05/18	岩佐氏歡迎圍碁會	台灣日日新報
1918/05/27	岩佐六段と臺中	台灣日日新報
1918/07/19	小川儀一郎三段の碁客來北	台灣日日新報
1918/08/01	圍碁方圓俱樂部	台灣日日新報
1918/11/13	臺中圍碁大會	台灣日日新報
1919/01/28	基隆圍碁會盛況	台灣日日新報
1919/02/22	仙友碁會	台灣日日新報
1919/10/08	嘉義圍碁會	台灣日日新報
1920/06/21	全島圍碁大會近來の盛況	台灣日日新報
1921/01/05	方圓社設置支部	台灣日日新報
1922/02/04	全島圍碁大會	台灣日日新報
1925/01/04	井上五段歡迎碁會	台灣日日新報
1925/12/26	瀛社詩壇 圍棋	台灣日日新報
1925/12/27	瀛社詩壇 圍棋	台灣日日新報
1926/06/19	盛況を極めた聯珠圍碁大會參加百二十名	台灣日日新報
1927/04/23	盛況を極めた全島圍碁 競技大會二十二日 本社三階に於て開催	台灣日日新報
1929/05/29	台灣碁客は東京へ吳清源と交流	漢文台灣日日新報
1929/08/02	入段記念圍碁競技會四日基隆で	台灣日日新報
1929/10/22	赤崁圍碁大會	台灣日日新報
1930/01/17	全嘉圍碁大會	台灣日日新報
1930/01/28	全島有段者 圍棋戰本社主催て二月一日開 催臺灣日日新報	台灣日日新報
1930/06/17	陳初段被露圍碁大會 (臺南)	台灣日日新報
1931/03/05	高部七段歡迎棋戰	台灣日日新報
1931/03/15	故永田氏追悼圍碁會	台灣日日新報
1932/04/12	嘉署圍碁大會	台灣日日新報

1932/05/18	婦人箤客歡迎箤會十七日から本社三階で	台灣日日新報
1932/07/24	棋樂圍箤會發會披露	台灣日日新報
1933/01/06	井上六段與臺北碁客有段者對局	漢文台灣日日新報
1933/01/21	全島圍箤大會	台灣日日新報
1933/01/25	井上棋遊氏が全島圍箤行脚	台灣日日新報
1933/06/03	臺灣棋道研究會の圍箤競技會	台灣日日新報
1933/08/01	井上六段歡迎棋戰	台灣日日新報
1933/08/05	赤岩嘉平四段來臺	台灣日日新報
1933/10/14	嘉義島人箤界籌設俱樂部	台灣日日新報
1933/10/17	四團體の圍箤競技臺日が優勝	台灣日日新報
1933/10/22	棋樂會圍箤大會	台灣日日新報
1933/10/24	嘉義籌聘講師	漢文台灣日日新報
1933/11/13	全國圍箤大會	台灣日日新報
1933/12/01	安達三段の來台	台灣日日新報
1934/02/06	碁界發達	漢文台灣日日新報
1934/07/10	臺灣圍碁研究會の役員決定	台灣日日新報
1934/07/18	箤盤の上に咲かす日滿親善	台灣日日新報
1934/08/01	榮園箤俱樂部生る	台灣日日新報
1934/10/14	臺灣棋院創設	台灣日日新報
1934/10/16	有段者圍箤手合	台灣日日新報
1934/11/20	圍箤指導教授 臺灣棋院	台灣日日新報
1934/10/21	圍箤大會へ本社から金牌寄贈	台灣日日新報
1935/02/21	廣瀬氏來臺	台灣日日新報
1935/04/13	南投圍箤大會	台灣日日新報
1935/06/07	臺灣棋院の五人抜戰	台灣日日新報
1935/07/19	本因坊招請の全島圍箤大會 きのふ幹部會 を開き 運動の具體化を決す	台灣日日新報
1935/07/25	大甲圍箤比試	台灣日日新報
1935/10/11	三宅七段歡迎箤會	台灣日日新報

1935/10/26	本因坊迎へ全島圍碁大會	台灣日日新報
1935/11/08	名人圍棋 講演會明夜七時警察會館で	台灣日日新報
1935/12/19	臺灣緣故者が寺内大將招待東京で圍碁會	台灣日日新報
1936/01/11	臺灣圍棋研究會では日本棋院支部設立を計畫中のところ	台灣日日新報
1936/01/26	名人カップ争碁圍碁会大会	台灣日日新報
1936/03/16	地方近事初段披露の圍碁大會	台灣日日新報
1936/07/13	臺中州廳員の納涼碁會	台灣日日新報
1936/08/16	員林圍碁大會	台灣日日新報
1936/11/07	大甲秋季圍碁	台灣日日新報
1936/11/13	賭 碁の一昧南署の手で檢舉臺北では最初の捕物	台灣日日新報
1936/11/26	瑞芳圍碁大會	台灣日日新報
1937/01/26	台北圍碁俱樂部設立	台灣日日新報
1937/03/05	臺北圍碁俱樂部發會圍碁大會	台灣日日新報
1937/03/13	圍碁大會盛況	台灣日日新報
1937/03/23	嘉義圍碁俱樂部盛況有段者一名	台灣日日新報
1937/08/06	古今賭碁夜話	台灣日日新報
1938/04/06	歡迎碁會	台灣日日新報
1938/04/24	素人圍碁選手權大會の臺灣豫選	台灣日日新報
1938/11/13	彰化市圍碁大會	台灣日日新報
1938/11/24	喜壽祝賀圍碁會	台灣日日新報
1938/11/28	鷺頭翁祝賀碁會	台灣日日新報
1939/04/06	春季圍碁大會臺北圍碁俱樂部で	台灣日日新報
1939/04/20	日本アマチュア圍碁選手權大會の臺灣豫選	台灣日日新報
1939/05/30	鹽糖圍碁大會	台灣日日新報
1940/10/27	木谷七段來臺	台灣日日新報
1940/11/07	木谷七段圍碁講演會十二日夜警察會館で	台灣日日新報
1940/11/13	圍碁指導講演會木谷七段大棋盤で解說	台灣日日新報

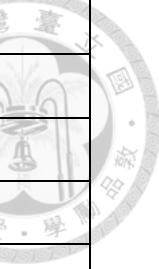
1940/11/15	木谷七段歡迎箚會	台灣日日新報
1941/03/06	賭棋發覺	台灣日日新報
1941/05/20	日德圍棋會	台灣日日新報
1941/06/22	送別會圍棋	台灣日日新報

雜誌資料整理

年代	內容說明	雜誌名
1903/09/25	圍棋詩	臺灣教育會雜誌
1906/12/01	秋季圍棋大會	臺關
1916/04/10	四段の碁客としての田村達太郎氏	新臺灣
1916/12/07	仙遊會と縁起	運動と趣味
1918/07/10	藝苑消息	新臺灣
1918/07/17	通信局の碁天狗連	臺灣通信協會
1919/01/10	臺灣碁界雜話	新臺灣
1919/03/10	春霞秋水	新臺灣
1919/03/10	芝蘭堂碁話（一）	新臺灣
1919/05/20	芝蘭堂碁話（二）	新臺灣
1919/06/21	芝蘭堂碁話（三）	新臺灣
1922/01/25	鳥鷺戰記	臺灣遞信協會雜誌
1922/01/00	對局に現はれる碁客の性格	實業之臺灣
	支那異棋客應我招 將於來月舉家渡 航	まこと
1928/11/01		
1931/03/15	故永田氏追悼圍碁會	臺灣齒科月報
1933/01/31	うち過ぎの手	霸王樹
1933/03/15	幸榮俱樂部報	霸王樹
1933/04/15	幸榮俱樂部報	霸王樹
1933/05/01	圍碁と賭博	警友
1933/05/15	幸榮俱樂部報	霸王樹
1933/11/08	圍碁と人生	臺法月報



1933/11/15	圍棋講座	專賣通信
1933/12/15	圍棋講座（二）	專賣通信
1934/01/15	圍棋講座（三）	專賣通信
1934/02/15	圍棋講座（四）	專賣通信
1934/03/01	圍碁漫談 趣味の臺灣	趣味の臺灣
1934/03/15	圍棋講座（五）	專賣通信
1934/04/10	圍棋私見	台灣棋道
1934/04/10	棋道禮讚	台灣棋道
1934/04/10	碁界ニュース	台灣棋道
1934/04/10	三の三、天元打は魔道か	台灣棋道
1934/04/10	臺北同好會成立の経過と其の事業	台灣棋道
1934/04/10	鳥鶯雜筆	台灣棋道
1934/04/10	昭和模範棋	台灣棋道
1934/04/10	目録（台灣棋道 創刊號）	台灣棋道
1934/04/10	圍棋は其時の心境で勝つ	台灣棋道
1934/05/10	あっと云ったが此の世の別れ	台灣棋道
1934/05/10	圍棋講習會	台灣棋道
1934/05/10	専門家と素人	台灣棋道
1934/05/10	棋界往來	台灣棋道
1934/05/10	ラヂオ放送（第一講）	台灣棋道
1934/05/10	圍棋對戰の秘訣	台灣棋道
1934/06/10	圍棋を學ぶ動機及感想	台灣棋道
1934/06/10	瀬越七段指導棋	台灣棋道
1934/06/10	棋界往來	台灣棋道
1934/06/10	棋客の本分	台灣棋道
1934/06/10	實戰講話（一）	台灣棋道
1934/06/10	JFAK ラヂオ放送圍棋講座	台灣棋道
1934/06/10	棋の話（一）	台灣棋道
1934/11/02	水產課圍碁天狗大會の記	臺灣水產雜誌



1934/11/20	趣味の話 暮將棋聯珠	臺灣
1934/12/01	筆にまかせて	相思樹
1935/01/01	趣味の話 暮將棋聯珠 (中)	臺灣
1935/03/01	娛樂に教へられる	臺灣教育學
1935/03/20	趣味の話 暮將棋聯珠 (下)	臺灣
1935/08/05	始政四十周年記念博覽會	臺灣
1935/10/22	暮相漫筆	南巷
1935/12/05	無題	臺法月報
1936/01/01	名人招聘圍碁研究會	專賣通信
1936/02/05	名人指導棋譜	專賣通信
1936/12/29	圍棋詩	鷗盟
1937/03/10	高橋四段 古賀一級指導棋譜に就て	專賣通信
1937/06/25	圍棋詩	詩報
1938/01/01	圍碁上達の妙諦	臺灣地方行政
1938/01/01	基隆雜景 暮の話	臺灣水產雜誌
1938/03/18	松下圍棋	詩報
	臺北市公會堂に於ける春季圍碁大會	
1938/05/01	を觀る	臺灣地方行政
1938/06/01	本誌主唱 五人拔棋戰	臺灣地方行政
1938/06/15	圍碁研究會生る	臺灣の專賣
1938/07/20	圍碁研究會臨時棋戰觀戰記	臺灣の專賣
1938/08/15	圍碁研究會月例指導棋戰觀戰記	臺灣の專賣
1939/04/07	圍碁	臺灣遞信協會雜誌
1939/01/01	本誌主唱 五人拔棋戰	臺灣地方行政
1939/04/13	圍碁の常識	臺灣鐵道
1939/05/08	圍碁の常識 (二)	臺灣鐵道
1940/02/01	鹽腦課圍碁大會戰記	臺灣の專賣
1941/01/01	交友會圍碁	臺灣遞信協會雜誌

1941/02/01	日本棋院木谷七段、安永四段兩氏を 迎へて	臺灣之專賣
1942/07/15	臺東圍碁天狗會漫記	臺灣之專賣

*文字「筈」は、当時の「棋」の異体字と推測する。

